

913.6
M668k

三味通人作
戀の重荷

聚芳十種第七卷

子傳露
七変化

913.6
M668k

三味道人著

恋の重荷完

東京春陽堂發行

913.6M668

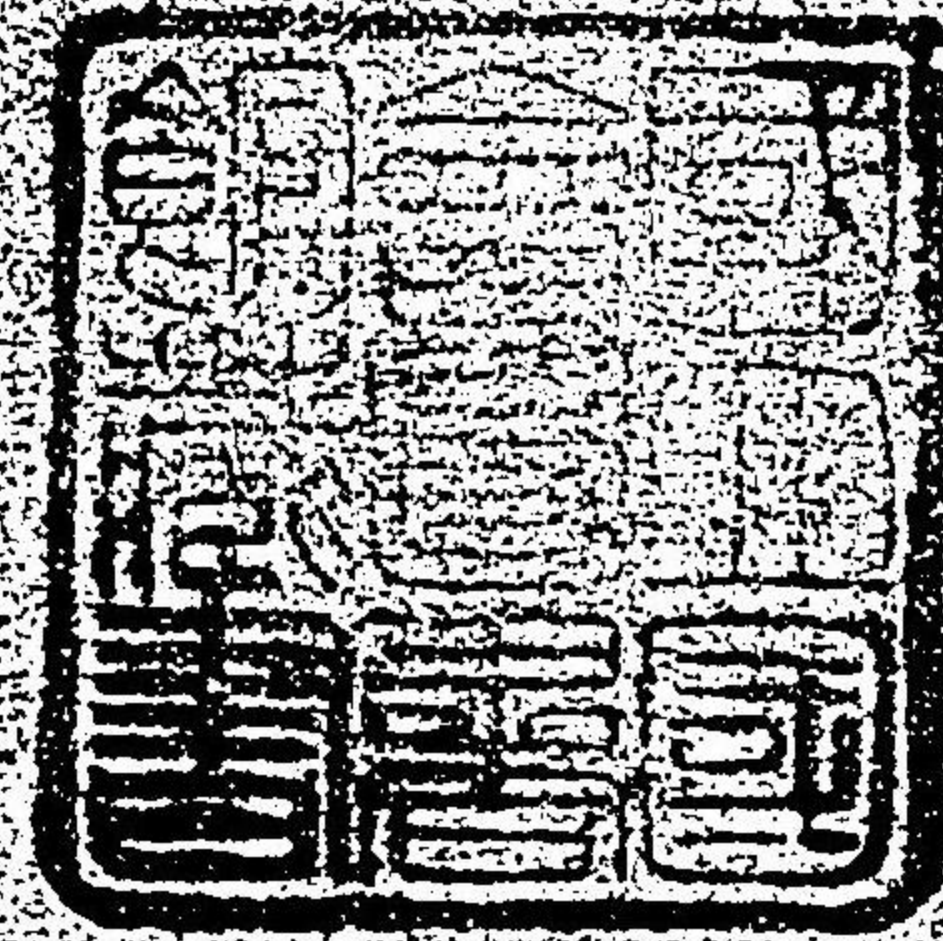
戀重荷

(一)

三味道人著

父^{ちち}母^{はは}のゆるしなきに文^{ふみ}を通^{とほ}はし思^{おも}いは垣^{かき}をこゆ
 るの誠^{まこと}めにもたがひし事^{こと}とさしも草^{くさ}もゆる思^{おも}ひを堪^た忍^{しの}び今^{いま}
 日^ひまでは黙^{もく}止^どしへごも世^よに憂^{うれ}き事^{こと}の重^{おも}かりていく臨^ま鏡^{かがみ}
 の濡^ぬ衣^いかはく問^ともなき我^{わが}加^かの涙^{なみだ}の露^{つゆ}の玉^{たま}の緒^{いと}も絶^たる許^{ゆる}りの
 苦^{くる}ほしさを慕^たふ君^{きみ}にも知^しせまぬらせずもし此^{こゝ}まゝに空^{そら}くも
 あるあらば如何^{いか}に悲^{かな}しき事^{こと}あらん寶^{たから}ては亡^なき後^{のち}に御^{おん}手^てづか
 ら一本^{いっぴん}の花^{はな}をも手^て向^{むか}られあはれのものとの御^{おん}言^{ことば}の葉^はをも照^て

戀の重荷



337067

らんとしてはづかしさがら涙の露に思ひの筆を染めり誠
思ふこと儘あらぬが浮世とはいひあがら我身こと過世如何
ある悪業にや思はぬまがつみに障られて思ふ殿に添ん事も
かあはで行末悲しき事にありゆきいはんと佛神にも見放さ
れいひしと後の世もかぼつかあく存じ最ぞ悲しう存じり
女子の身にて斯るをゆいへば恥を知らぬものとの御さび
しみもはづかはしく御座いへども妾と御前様とは筒井筒振
分髪わけがみの幼こきより一ツ館たての中に睦なごみ遊あそび離遊りあそびの戯たわぶむれにも
御前様おんまへさまは男おとこ離りな妾めかけは女め離りなと戀こひてふとも知らぬ同士の戯たわぶぶれ合あ
ひたる夫婦ふうふごとも過世あきよよりの縁ゆかりにや侍まへらん身に染しやくと嬉うれし
く覺おぼえ幼心こころにも此殿このとのあらで仇あだし男おとこには見えまじと思ひ染め
り其後そのあ互たがひに成人せいじんして男女たにの別わかちを正ただしくすべき頃ころ及およぶとあ

りては御前様おんまへさまも日毎ひごとの御勤ごごんめ朝暮あすむ館たてへは御おんわたりあされい
ても以前いぜんの標めしに妾めかけがほとりへは近づき給たまはす妾めかけも人目ひとめの關せき
を憚おそかり掛かけしうは御前様おんまへさまに詞ことばをかはしまぬらせすいへど
もそは唯ただうはべ許ゆるりにて思おもはいよく増穂まきほの薄亂うすまがれ心こころにあ
る迄までに夜よるとあく晝ひるとあく御前様おんまへさまの御事ごごのみ思おもつゞけ佛神ぶつじんへ
の願言ねがひごとにも唯ただ々々御前様おんまへさまと一ひとつにあして賜たまれかしと念ねんじるの
外ほか他またし詞ことばも侍まへべらず又母上またはうじょう様さまにも家中かみちにては辰丸たつまるあらで姫ひめ
が婿むこにとるべき者ものあしと常々つねづね仰おほせられい由よしほとり近ちかう召使めかけ
い者ものの中ちゆうすを聞ききては嬉うれさは包かまんすれど頬ほにあらはれ
て女子むすめ共に騁うらるゝさへ憎にくみ一日いちにちも早くと念ねんじりさるに斯
遠とほからぬ出雲いづみの方かたを伏拜ふせみ一日いちにちも早くと念ねんじりさるに斯
ばかりの妾めかけが念ねんも神々かみかみ様さまへは通とほじぬにや此程このほど世よにも恨うらめし

く口惜しき障礙の出来り御前様にも御間及び御座あるべきや豫て家の敵と聞えし中島の城主洲濱重虎殿此たび和睦ありしに付ては妾を婦妻に懇望のよし豫ては心良からぬ人として鎬を削し中あがら此度の和睦は家の爲め國の爲ありとて妾を婦らすべきと父上の仰せらるゝに胸潰れり所詮御前様を差置き如何あらん人ありとも他男に身を任すべしとは思侍らずまいて今迄城の人々が復のやうに云做し忌嫌し洲濱殿に如何に父の仰せありとて妻と呼れて此世に生存んとしも覺すざりとて此期に及て父の仰を云もどかんやうもあし妾が生命は今日翌日につゝまり御前様露ばかりも妾が心根を哀れと思召さば妾を伴ひ何方へも退て賜れかし野末山の奥ありとも御前様と二人住んには如何に嬉しく

いはんどたゞそれのみ願はしう存じり若し又さる願ひは協へがたしとの御事あらば責ては妾が亡後にて一遍の御回向あし賜はらば嬉しう成佛いたしり所詮思ひに細る玉の緒日頃の念願届かずば一思ひにと思ひ決めいま、恥かじさをも打忘れ思ひの丈を打啣ちり兎にも角にも一言の御返しそを生命の際と念じ居りりあかかしと

辰丸 さ ま

初音

(二)

丈に餘る艶書をさらく巻返し聲荒らけて悴々と呼立つれば常に變りて慌忙しき父上のお聲何事のいやと馳來るをハツタと睨まへ此の艶書記臆ぞあらめと目先へ突附るを辰丸情々

戀の重荷

と見れども見別れぬ女の手跡讀めぬは書簡の又言あらで父の
氣色と彼方を一目此方を一日父の面と書簡の面を迷がはりに
眺めても不審晴れねば徐かに書簡を繰廣げて讀もて往けば切
ある心を書盡したる艶文にて末に初音より辰丸様へハツと顔
を赧らめて思はず書簡を取落せば父は膝を摺寄せてやを辰
丸其書簡封を解きたるからは汝は疾くに讀みたるあらんイ
何と御返詞をまわらせし眞直に申せと責られて否とよ何
とも御返詞はまわらせず又宛名は慥にそれがいふれをそれ
し未だ何れよりも此書簡を受けたることあり況て封解きたる
記應ひはずとも父上は何處より此の書簡を得たまひたる最と
不審くいふ顔つくく打眺め汝は父を詐るかトハ又何故
汝如何に詞を巧に構ふることも此書簡汝が訣より出て斯く封さ

へ開たれば汝は此書簡讀たるに相違はあらじそをしがすがに
父に匿すは彌々御返詞をまわらせたるよちイア何と認めた
るそを言へ聴かん父上辰丸不肖にはいへども生來十六年の今
日まで幼稚遊びの戯ぶれにも曾て詐りを申せしことありそも
父上は辰丸の心腸を腐れるものと思召すやらん姫君如何にの
たまふとも斯るあまめきたる御書簡へ御返詞を參らす辰丸
あらずさうらば慥かに御返詞を參らせし事あきや御返詞は
き此の書簡見るは今が始めにていものを辰丸能う聴け姫君は
今大切の御身あり此の書簡にも爪めかし給ひし如く洲濱より
婚儀の言納あり洲濱像ては離敵の中あれ今や西に毛利あり
東に浮田新たに起りて其勢ひ當りがたし其中間に立つ小城の
主が互ひに鵜蚌の争ひをあして漁父に獲物あらずべき時あら

す今度の和睦は兩家の爲め將又備前一國の諸城主の爲あれば
最愛の姫君がら枉げて與へんどの主君の御深慮あり斯く大
切の今に當りて姫君の御身に如何ある障礙もあらんには是由
々しき大事あり斯くいはい無慚の處置と思はんが汝腹切て姫
君の迷ひを霽しゆさせよ我も汝は一人兒あり母あきものとして
慈愛は尋常に増したれど主君の御大事には代へがたしといひ
かけて願ふ聲音を咳嗽に紛らしやよ悴心を得たるかといふに
長九は慨然として長九年尙ほ幼あしといへども戰場に屍を曝
さんは日頃願ふ所ろあれど斯る事にて生命を落さんは武士の
本意とするところにあらずさりあがら是も彼も主君の御爲と
あれば兎角いふべきにあらず潔よく腹切り申さんといふ此時
次の間の襖を徐かに押開けて入來りしは譜代の若黨與茂七と

入

いふものあり主の前に額をつきて侘いふ仔細は尙かに承たま
はりぬ主君の御爲に御愛兒を失はんと仰らるゝ殿の御胸中
察し奉れば涙の外は候はずさりあがら是は御主君に罪得たま
ひしにあらす姫上我が若殿に悪想ましませしこと申さば若殿
には冤罪あれば行末長かるべき御生命を茲に縮めさせ給はず
とも姫上若殿を思し断せ給ふやうにだに計らはい更に障礙は
いはじあはれ冀がはくは若殿を暫しそむがしに預けさせ給へ
潜かに御供して忍ばしまわらせ姫上の御興入首尾能う畢りた
る後を待ち若殿を再び御館へ御供申さんといふ固より殺し
ともあき愛兒の事あり父も膝の進むを覺えずトハ又何處へ伴
あはんといふやらんと問へばさんい御忘れやいひしそれがし
が叔父美作の瑞雲寺にいへばといひかくるに隣と小膝を打ち

萬汝に任すべし。と満悦の色面に溢れぬ

(三)

頃、永祿の初年、あり備前の國中島の城主金川高光と、同じ和田の城主洲濱重虎と和睦の談調のひ金川家の息女初音姫、和田へ興入あるべしと沙汰す。姫は今年十六年一家の中にて老臣の列に在る金川伊織の一子ある辰九と同年輩とて幼き頃より馴睦み殊更辰九は襁褓の中に生母を喪ひしに、お姫の母君不愍がりて四五歳の頃より館の中へ呼迎へ、姫と共に養育せられし。かば二人が相愛の情は同胞よりも濃やかありされば、辰九は十二の折に、姫の館を辭して今は父の許に在り、只管武藝文學を研ぎ、今も尙ほ日々、に奥御殿へも伺候すれど、男女の別を思ひ、君臣の禮を慎しみて、昔の如く、姫の邊り近うは侍らず、去共、姫は春

情萌し、頃より昔の睦みを其まゝに深く、辰九に心を傾け、口はそれとは出さねを、心には末の良人と思ひしむれば、色にも何時か現はれて、辰九の來し折は、常の静淑あるに似ず、最とそは、
き舉動にて我さへ怪と思ふまで、顔に搔散る紅葉の色を人は、
あ怪しまんとわざと物の影へ隠るゝばかりあり、姫の母君も辰九は幼き頃より我子の如く慈しみたる兒あり、心ざまも剛に、
伶俐にして行末は天晴の武士とあるべき性見ゆれば、最と頼母、
しくて彼をこそ、姫の婿にせんと思ふ心を、近侍の者らにも語ら、
ふとあれば、姫は早くもこれを漏開きて、早や事成りし如く、悦と、
びて、婚姻の期を何時か、と待詫び居たり、然るに思ひ掛あ、
も日頃一城の隣とし敵とし利を見て、義を知らぬ豺狼に、齊しき、
寇賊として、上下口を極めて罵しりたる和田の洲濱が、俄かに我

を折りて懇ろに和睦を請ひ姫を妻女に受けんと言納れ父
高光はこれを許し給ひぬと聞えければ姫の驚きははんに詞
あしさらぬだに長丸の外には男に見えまじと思ひたるに彼の
洲濱は元野伏の頭領にして今より久しからぬ以前屬したる主
家津高の松田家と云るを押し倒して一城の主とありたるに謂
は盗賊ともいふべきものあり人さへあるに斯かる輩に如何
で長丸の事を思ひ絶えて妻と呼ばれ良人とかしづくべきあ
心愛しとて朝に夕に涙の乾く間もあしされど父の仰せはも
かんやうもあらざれば唯心地煩らはしとて深閑の中に引籠り
袂被ぎて臥居たり姫のほそり近う仕ふる姫竹とて心利きたる
女あり年は二十ばかりあるが是も諸第の士の娘にて最と幼
き頃より奥仕へして常に姫にかしづき居たれば姫も日頃同胞

の如く親しみ居たり此の婿竹姫より年の増りたれば懇にも智
慧の廻り早く姫と長丸との事情をも知れば姫の餘りに思ひに
沈むを見て潜かに姫に教へ玉章を認めさせせて或日長丸の來
たりし折潜かに其の袂へ投入れぬされば今日や其の返書ある
べき明日や色よき應あらん長丸如何に心強くとも切ある心を
書盡したる彼の文を見れば如何で心の動かさざらんと婿竹が起つ
も居るも安からぬさまにて昨日も暮れぬ今日も仇に過しつと
心を碎くは我ゆえと思へば姫は却て婿竹を慰さめ左のみを急
きそと宥めあがらも心の中は飛立つばかり最と待たしく思ふ
間に早や十日あまりを歴れども返書はあく併も此程迄は日毎
に來たりし長丸の文を贈りしより絶えて來ずありしに今は早
や堪兼ねて婿竹を呼べは婿竹は色青さめて來り姫上様必か

ろき遊ばすあ、ハ又何事ぞ。辰丸様は伊織様のお計らひで御出
家あされ薄と申します。エ、まだそればかりか姫上様の御入
は明日に定まりました。エ、マアそれは誠か。誠とも誠とも唯今
其の御沙汰で御座ります。婿竹コリヤマア何としたものであら
うのう。妾も唯顛倒いたして居ります。

(四)

王昭君が出されて胡に嫁ごし思ひ西施が選ばれて吳宮に入り
たる心にて初音姫は和田の洲濱へ歸さぬされば洲濱は唯仙家
の花を手折り龍宮の明珠を撈り得たる心にて悦ぶこと大方
あらざれども姫は花笑ひ鳥歌ふ春の日も風荒み霜重き秋の天
の心地して既に合巻の式を畢へ一つ館に起臥はしあがら心地
煩らはしと言成して絶て寝床を俱にせずかくて二月あまりを

歴たれど洲濱は初めの悦びしに似ず憂きを恨む氣色もあ
又寝床を俱にせよと逼りもせず朝夕唯何氣なく氣分を問ふの
みあるに針の筵に居る心地もやうやく安堵る思ひあがらも又
底の心をはかりかね中島より具し來れる侍女婿竹と忍び
に語りては身の薄命を啣ちつ、果は辰丸の事を言出ては今
何處に如何にしておはすやらん妾は斯る身にありても斯く忘
るゝ間あく慕へども彼の人は妾が上を如何に思ひておはすや
らん妾が戀慕せしばかりに父御の勸氣を籠りて花の蕾の年
にて心にもあき出家遁世嘸や本意なく恨めしく妾を憎しと思
されん縦令憎しと思すとも妾が慕ひまわらする心は何時々々
迄も變らぬものを此世の縁は薄くして斯く離れくゝにありし
かど來世は一蓮托生を許し給へまご邊にもあらざる人に接口

説て涙を責ての慰さめ草に又十日あまりを送りぬ然るに或夜
姫は良人洲濱の舉動の最と異しきを見出しぬ姫は夜深に不
目醒めたるに枕邊に燵棄たる香の烟も断々に有明の燈火微か
ある影の下に一人の男兒何やらん書簡と覺しきを繰廣げ居た
り姫はあまやと躍る胸を鎮めて身動きもせず眸を定めて其人
を信々見れば良人洲濱あり不審やと邊近く設けたる寢床を見
遣れば裳扱の殻あるに彌々良人に相違あけれを情も如何ある
秘すべき書簡にて畫の間明らかさまに讀みはせで斯く夜深け人
鎮まりて名のみあがらも其身の妻の寢息までを窺がひて潜や
かには見るやらんと疑ひあがらも我身に關はる事あらぬは問
ふべくもあしと其儘に過したるが又一夜二夜過て或夜枕邊に
て人の物語する聲聞えしに姫は又目を醒して見るに良人は又

も寢床を振出殘燈の下にて家臣の一人と語らふあり最と潜や
かに語らへば何事やらん聞分られぬ中島といへる語の鮮や
かに聞取られしに胸轟ろかれて尙ほ心を澄して聴けど能くは
聞えず稍々久しく語らひて最後に速やかに押寄せて中島を落
すべしと言合せて家臣は退り去ぬ諸は親家の上ありと姫は我
を忘れて起上れば洲濱は太く驚ろける状にて手に持ちたる書
簡を忙がはしく懐中へ隠さんとするを姫は走寄て書簡に手を
掛け吾夫其の書簡委に見せて下さりませと引手繰れば書簡は
颯と切れて半は洲濱の手に残り半は姫の手に入りぬイヤ
是は御身の見るべきものあらずとて取戻さんと争そふ洲濱を
押退けて書簡を雨の袖に圍ひ身を楯に打捲ひて離さぬに洲濱
も流石手荒くも争そひ兼てや戻せとせがむのみ困じ果た

る風情あり姫は聲を振絞り吾夫河故有て中島へ押寄やうとは
仰せられます。ヤア何と。まだ寢床をば俱にせねと合意濟みて夫
婦とあれば妾が父は殿の岳父其岳父に何違恨あつて不意打
をばさされます。然らば今の密談を。アイ残らす聽取ました。ヤ、ヤ
ヤ、ヤ、ヤ、聽いたとあらば是迄あり遺恨の仔細語つて聽かさん
能く聽け。と姫を尻目に座を占めぬ

(五)

恨みは今に始まりしにあらす今こそ一家の好みを結びたれ我
と御身が父とは年來の敵にして我は常に御身の父を攻滅して
中島の領地を併せんと思へり然るに先に俄に我より和を請ひ
て斯く婚姻を結びしは至たく別の仔細にあらす偏に御身の世
に優れて容顏美麗との贈を聽き見ぬ戀にまぐがれて切ある思

ひのやるせなく男兒冥加さる近國へまで聞えたる麗ある女子
を妻とし娶らば如何に樂しき事あらん人間の樂しきは富貴の
望みのみあらんやいでや領地を廣むる心を酬じて切ある戀を
協べんと其處に心を一決して日頃は人に手を下げぬ重虎が戀
あればこそ口をすばめ腰を屈め和議を請ひ婚姻を求めたるに
願望忽ち成就して斯く御身を呼迎へ悦こびし甲斐も情あや
御身は我を嫌へるか外に契りし情郎あるか悩しげにも見えさ
るに病痾ありと言成して合意の式を舉げしより早や一月の今
日にあるまで絶て臥床を俱にせず名のみを妹背もどかしや今
迄は詞にも色にも現はさざりしかど斯く美しくしき容顏を目前
に眺め夜は寢床を並べあがら高嶺の花と手折もやらす冷たき
衾打被を春は立ども心の氷を解く由もあく日を歴るは中々に

見ぬ懸にあくがれし昔にまさりて苦しきぞや斯ては領地の望
みに代へて娶りしは最愛妻あらで是れ恨みを娶りしあり實て
は中島を攻落して此の新たある恨みを奪さんと事の此に及べ
るあり我の岳父に無情當るは御身の我に無情かりし報あり偏
に我を吝み給ひそ是とて御身を愛る餘に出たり憎しとあ
思ひ給ひそと重虎が啣つ節々初音姫が胸にはひしくと釘の
たつ如く強悪無慚の人あら正しき我良人あるに我身其心に
従がはぬより悪業を増せんは罪深し況て其悪業は我父の家國
に關はる事あり悪人あら戀には必優しきを如何に我が思ふ
人へ心の操を立つるとはいへ愛さばかりが女子の道にもある
まじきに所詮幸あき此身あれば過世の業と諦らめて此の人の
心に從ひ兩家の間の無事を計らんかと一たびは思ひ返しあが

らも兎かく辰丸慕はしく重虎の厭はしさに取つ置つ詞なく
しは時を移せしが必附き、シテ中島を落すには如何ある手段が
御座りますとら問へば、オ、サ何事も包むに及ばぬ此程段々
計謀を以て手懐けしところ中島の勇將島根右近が機を窺がひ
主を打て此方へ城を渡す筈ソレ其の書簡が内通の状、
、忠心無二のあの右近が、何時まで暗主に忠を盡すも主
が成出る時あければ臣下も一生埋木ゆゑ所詮足下の明いうち
に働らき甲斐ある主へ見立替し一城の主にもあらんと我へ歸
伏の此状を篤くりと見て疑がひ晴れよと投出す書簡の字を鑑
合せて森ろく胸を押鎮め押鎮め讀めば讀むはさ驚かる、内通
の状今の今迄比類稀ある忠臣と思ひこみたる島根右近が今よ
り三月の中を期し現在主たる我身の父を殺害し首尾能く事の

成りし時は眞烟をあびて合圖とすべし其時速やかに軍を出し
て城を乗取り給へど知らせの状姫は讀終りて寸々に引裂き吾
夫此の御企ては何として思止まることはありませぬか。ナ
ソノ本はどいへば御身が我に從がはぬ故のいはれ腹癒せ。
さらば妾さへ御心に從がはい。何で斯る企てをすべき。必らず思
し止まり給ふか。さらば心に從がふとか。サアそれは。岳父の首を
斬架けうか。サアそれは。心に從がふか。吾夫、從がふとか。満悦
々々イヤ此方へ。と手をとられ胸は早氣は半亂果は涙の雨と
あり雲の髪髪打解けても尙ほ解けやらぬ心の下紐苦しき契に
曉近き夜を待詫しく明しけり

(六)

怖ろしき夢とたんのうして一夜を明したる初音姫は起出て後

情々と思案するに父母の大事のやみがたさ良人の心をあため
ん爲我身かく口惜しさを忍びて愛き枕をかはしたれども是の
みにては心許あじ今迄忠義と一城の譽れ高き島根右近人々の
油断する間に父上を討まぬらせあば妾が苦心も水の泡あり殊
更右近は父上も軍師と頼み給ひ軍の事は何事も打任せておは
するあれば右近にして斯く心變りせし上は如何ある椿事の起
らんも知られず如何にもして此の由を潜かに中島へ言送り父
上に知らせまからせんとて彼の婿竹に一伍一什を告げ斯れば
良人の心を柔らげん爲口惜しあがらも其心に從がひしと物語
り諸如何にして宜かるべきと語らふに婿竹も思ひの外ある右
近の心變りに太く驚ろき又姫が心あらずも洲濱の心に從がひ
たる悲しみを慰さめ兼て暫しは詞もあかりしが免かく此儘に

捨置かんには雨々しき事にあり往くべし疾く御文をものさせ
給へ竹間主を語ひて潜に中島ある大殿の許へ届けまぬらせん
といふにぞ姫も誠に然ありと點首て頓て一通の文を認ため
夜長父より得たる彼の右近が内通の状を封じ込めたるを姫
に渡せば婿竹は姫の傳として中島より隨がひ來れる竹間小四
郎といふ若侍へ潜かに渡し云々の旨を告知らすに小四郎は眉
を潜めそは驚ろき入たる事あれど彼の島根主の人とあり我も
中島に居りし頃は御身等も知る如く彼の人の隊につきて久し
く左右にありつるが忠肝義膽宛がら鐵石の人にして如何に天
魔が魅入たりとも心變りあどすべき人にあらず最と怪しむべ
き事あら正しく内通の状ありといへば打捨ては置きがたし
兎にも角にも姫君の御狀を速やかに中島へ送りまぬらせん

りあがら我みづから赴むかんには此城の人々に怪しまれて思
はぬ障礙の出來べしとて潜かに心利きたる下部に命せて狀を
ば衣服の襟へ縫込め夜に紛れて中島へ赴むかせけりされば此
の密使障礙ことあく中島の城へ達したりや如何に返書は如何
にと姫は更あり婿竹も只管打案じ居る程に遠くもあらぬ處あ
るに中三日を隔てゝも未だ歸來す如何にと頼をあつめて
語ふうち五日目といふに使返書を得て歸り來ぬとて竹間より
婿竹に差出せば婿竹は忙がはしく姫のほとりへ持來り折籠く
他の侍女等も居らぬを幸はひ諸共に封目解く問もさかしく
讀下せば正しく父の手跡にて腹心と頼み切たる右近の變心驚
ろき入ぬさりあがら佛神未だ高光を察させ給はず御許の知ら
せにより計略を以てかびき寄せ酒宴に事寄せ武士に命せて手

捕にして即坐に首を刎させ畢んぬ右近既に誅に伏する以上は
今後心安く思さるべきものありと讀果て二人は顔見合せ齊
しく胸を撫下しぬ
日は早や暮れぬ洲濱は表より歸り來りぬ誠の契をあせし後は
出るも入るも以前に倍して快よげに豺狼の眼に笑を滿すに姫
は一入厭はしく心の中には佛名を唱へしが今宵ばかりは歸し
げに我身を尻目に坐に就く機嫌折宜しと姫はほどりへ播寄り
て吾良人何事ぞ島根右近は斬られましたや誠にか誠はそれ
如何にしてサア此程の内通を妾が中島へ知らせましたゆえに
シテ中島より返書はありしかアイ父の自筆で此の通りと蓋出
す文面打返へし打眺めよと荒爾小膝を拍ちて衝立上りて身
繕ひするに姫はあはたしく取鏡り吾夫いづれへお渡りあそ

ばず。

(七)

いづれへとは愚あり中島の城へ夜討の手配せん爲にと思掛あ
き洲濱の詞に姫はうろく吾夫か氣ばし狂はせ給ふかソリヤ
何事を仰せられます何をいふかとはまだ御身には分らぬかコ
レ嶋根右近が味方へ内通して御身の父を打つと先の夜いふた
は十一つには我が妻女にありあがら頑で心の儘にあらぬ御身
を否應云さす心に従がはせんが爲二つには忠勇無双と聞え高
きあの右近めが中島の城に居ては何時此方の裏をかゝれて
軍の掛引何分にも心に任せず我は怖しとも思はねど味方の士
卒に怖氣が附て度々の負軍去に依て手を變へ和睦を言入れ婚
姻までして心を緩させ用心のあきところへ不意に押寄せ一舉

に城を乗取らんと此頃絶えず問諜を入れて透があらると規が
 はすれど是とて右近が居る故にいッか守備を緩める色も
 し其處で今度は又手をかへあゝいふて御身が手より右近が
 心を中島の城へ報させあの手強右近めを敵の手で打斬らせ
 所謂毒で毒を片附其跡へ夜討を仕掛けて狼狽へ廻る中島の奴
 原片端から斬倒し城も領地も捲上げてかねての望みを晴す所
 存是れ即ち反問苦肉の計といふものぢや。エ、エ、エ、エ、そ
 んあらあ右近が内通の状といふたは知れたことアリヤ真赤
 赤偽物よ。エ、エ、左様とは知らず女の猿智恵父上の御身の上
 事あらせまいが一杯で欺かられるとは露知らず妾が中島へ使
 を立てたればこそ忠臣無二の右近を殺し中島の勢ひを弱める
 やうにしあしたは妾が手づから父上の兩の腕を殺落したも同

じと口惜しいとを致しましたよナア。イヤ御身あまは年も往か
 ん深閨の中の姫君様さもあるべきことあがら敵の大將へ縁附
 た娘から使が来たとて一應の思慮もあくオイソレと味方の勇
 士の首を斬らるゝ老若殿のか胸の中が透いて見えて笑止千丈
 此有様では何か御意に協ふやうに今一狂言仕つたあら軍兵
 あまは差向うとも城も領地も婿引出に闘斗をつけて下されう
 も知れぬサテ面白いとではあるぞイヤ夫は夫と致してコレ初
 音イヤサ我等の奥がた様縦令中島の城は奪取り里方は寂滅爲
 樂と滅るとも御身は我等の大切を奥方里があいとて決して鹿
 略には扱かはぬ今にも増して最惜がつて可愛がつて撫摩つて
 進ぜる程に必ず一氣遣ひあるあア、此やうな花のやうに美
 くしい奥方は我手に入るまだ此上に婿引出として莫大に進物

にあらづかると思へば思へば重虎は果報めでたき生れを見え
るドリヤ進物を受取に参らうかと飽まで嘲けり程かんとする
を前へ廻つて立塞がり吾夫何處へ。ハチくとい夜討の支度に行
くとやすじに。イエ。一寸も動かさずはやすませぬ。エ、物には
し狂ふたか大事の夜討が時移る狼狽て怪我はしたまふ其
處退き給へ。イ、へ退かぬ退きませぬ。モ、吾夫先の夜も呉々
か諫め申した通り斯う打解けて夫妻にあつた上からは最う御
隔心もあるまいに妾が父は吾夫にも父上では御座いませぬか
其の父上の城ぢやものを取あされずともイヤといふ折吾夫
のか力にあるまいか又か取あされてからが父の物を子が取て
手柄にもありますまい謂は、金川洲濱兩家二つの城には分れ
あがら雙方合体一家も同様諸共に力を併せ他の敵を防いでこ

そ親類縁者の甲斐がある同志打して味方を損じ世間の笑草に
あるがお望みで御座りますか。ア此處の道理を思召さば右近
を殺したは是非もあいな宵の夜討は思しとまつて下さりませ
左様さへあれば何時々迄も變らぬ吾夫二世の夫妻で御座り
ますが若し何處迄も我を立通して夜討をするを仰せられれば
岳父へ敵たふ人非人今よりは夫妻であいな妾が方から縁切つて
縦令生命を失ふとも此座をば動かせぬ。ア吾夫由なき事を
思ひとまり何時迄も妻と呼び良人と呼ばせて下さりませ。と割
つ口説つ涙と共に諫めけり

(八)

暴戻非道の重虎すこしも聞入るべき氣色あくイヤ。此重虎
は城が欲しい領地が欲しい婿岳父の誼あさにはすこしも構は

ぬ又御身の方より妹脊の縁を切るあんざは事も可笑しや我
より戀ひたる妻あればとて勿体ぶるにも程がある女が一たび
男に見えて枕をかはした上からは縦令如何ある事があるらうと
良人に従がふが道ではあいかコレ御身が縁を切らうといふて
も身が方で切せぬ無益の事をのたまはんよりは寝床暖ためて
待ち給へ手配仕果ば疾く歸り来て終宵御身と語らひあん暫し
の間ぞ其處退き給へとまつはる姫を突退けて次の間へ立出れ
ば待設けたる婿竹が吾君何處へと立塞がる、エ、汝まで妨げす
るかど確と蹴倒し走り出んとする折しも俄かに響く攻太鼓唯
と揚げたる間の聲、ヤア心得ずと立止れば館のうち早や動亂し
て夜討ありと騒ぎ罵しり外は烈しき太刀音矢叫び固より不意
の事あれば味方は備へあらずして支ふるものもあらずと覺し

く敵早や館の中へ亂入し奥仕への女ばらが迷惑ひて叫くを聞
けば敵は御説口のはとりにも満ちぬ暗くして能くは知れぬ
旗の紋は中島の島根らしきぞよといふに洲濱は齒を切しはり、
ナニ島根がまだ死あで逆寄に寄せ來りしとや猪は計ると思ひ
の外此方が計略に乗りたるか無念至極といひあがらも、鏝をど
鏝櫃の蓋搔遣り胴丸の鏝取て投掛けしが籠手懸當を着る間も
ぞかしとや其儘に小袖を捲り上げ大太刀引提げ外の方へ一敵
に馳出でけり
此の有様に姫は唯果れに呆れてつい居たるが心附き懐刀を取
出し失庭に咽喉へ突立てんとする時婿竹は今がた洲濱に蹴ら
れたる身内の痛みに倒れ居たるが斯くを見るより我を忘れて
ガバと刎起きて走り寄つて姫の手へ緊かと取附姫君様とは御

狂氣は召しましたか。イヤ、狂氣はせぬ止めてくれ。コレ
嬭竹物の道理を能う思ふて見よ。心に染まぬ良人あが良人と
定めて既に枕もかはせし上は敵に城を落さるれば良人と共に
死ぬるが道よ。敵早や間近く寄せたりと覺しければ退附此處へ
も亂入すべし。面を見られて生取を晒さんより疾く自害せん。妾
が心嬭竹其處退きや此手を放しや。イヤ、退きも放しも致し
ませぬ。姫君様はか聞あされませぬ。か夜討は敵では御座りませ
ぬ。中島勢と申すこと縦令亂入致しても姫君様の御身に指もさ
す事では御座りませぬ。先づ御短氣を遊ばさすに暫しか待ち遊
ばしませ。イヤ、夜討の相手が中島勢ゆゑ尙々以て妾が生ては居
られぬ道理。ソリヤ何故で御座ります。何故とは嬭竹其方にも
似合はぬ。假令起りは良人の野心妾を欺むき中島へ内通させ右

近を殺して中島の城へ夜討をせん。討の裏をかゝれたるにもせ
よ。兎にかく妾より事起りて妾が里ある中島勢に此城を落させ
洲濱殿に生害させては良人といふ名に濟まぬ。エ、姫君様は殿
愛の奥方きたばかり岳父君の御首を擧げんとする。虎狼に増す
大悪人にも良人といふ名故に心中をお立遊ばすか。ハアハッ。と
手を緩めしが、イヤ、それは由なき心中良人とは名ばかり。洲
濱殿は御身の爲にも父君の爲にもゆさは驛で御座ります。其疑
に何が心中まづ此刀をお放し遊ばせ。イヤ、放さぬ。左様であ
い。イヤ、左様で御座ります。今にも竹間殿が参らば共々に御
介抱申して中島へか供申します。するあの小四郎主は何處に居て
ぞ早う来て賜れば宜い。と姫の自殺をといめ兼ねうろく。四
邊を見廻す折柄廓下に人音若し其人かど振向けば歸らでも宜

き洲濱重虎大わらははにあつて歸り來ぬ

九

最早や協はぬイテ初音落度し給へ諸共に落つべしと其身も
慌忙しく身繕ろひし鏡櫃の隅に秘めたる黄金を掻探して身に
つけあどするを姫は眩度打まもり吾夫此期に及びて落ちんと
は御未練あり妾も俱にまかりますゆゑ潔よく御生害あされま
せ。エ、愚あことをのたまふよ死んで花が咲くべきか何の里へ
も伴あひまぬらせ必安き日を送るべしイテ。と手を取るを
姫よりも婿竹拂ひのけ、姫君をば中島へお供いたします。と争そ
へば。ニ、又しても妨するか憎くき奴といひさま婿竹をムツと
攫んで撞と投退け姫を小脇に引抱へて奥庭へ逃いで前栽の木
の間を潜りて逃往くを婿竹僅かに身は起せど女子の甲斐あさ

恨めしげに唯だ其後を打眺め止めんやうもあらざりける
洲濱は初音姫を伴あひて案内知りたる城の森手の山をつたひ
て間道より遁れ出たるに幸はひにして其處には敵もあらざり
しかば暗さに紛れて城遠く落仲ひ敵も追はねば暫し憩はんこ
道のほとりあるとある木蔭へ姫を置き其身も枕瀬に尻打掛く
る程こそあれ俄かに城の方と覺しくて人音騒がしきには何
事と眩度其方を振返り見れば火の手あがり叫き聞かふ聲微か
に聞ゆ備は城に火を掛けたるかさるにても我中頃より一城の
主とありて固より譜第の臣とてはあらず其上今宵は不意の襲
撃おれば日頃たのもしと思ひし者共も出遇ひしやらん出遇は
ざりしやらん出遇ひしも敢あく打たれて抄々しき働きををし
たるはあらじと覺しき落城の後に至りて打物の音するは不審

三十八
火をかけたるも心得がたしと仰上りて見つ下に居つ只管胸
を騒がすれども馳返りて動靜を窺がはん擬勢はあらず姫は自
害も得遂げで洲濱の小脇に抱へられ暗き山路を伴あはれ夢幻
の辨まへなく此の處まで來りけるがやうやくに人心地つき越
方行末思ひ見れば先に逸早く死もせで良人といへど厭はしき
洲濱に伴あはれ來つること死ぬにまさりて心憂さ限りあしき
ればとて今更に死あんとすればとて死あしもすまじそを思へ
ばまつはりて死をといめたる婿竹恨めし彼だにあくば心安く
疾くに最期を遂ぐべきものをさるにても此後如何に成往くや
らん何時々々迄も此人に伴あはれんか心憂やと思ひに沈みて
詞もあらず既にして洲濱はやうやくに城の火を眺めやみ今宵
のうち今四五里も落ち明けあば里を尋ね旅支度を整のへ心

三十九
さす方へ赴むくべしとて姫を舌たるく慰さめ膝し手を引きて
往かんとすれど日頃深闇の中にありて歩み慣はぬ姫あるにわ
けて暗夜のたゞしさに歩み悩みて立もとをれば洲濱は負
ひて往くべしとて背を差出すに姫は唯夜叉に負はれし心地に
て其處とも分かす伴あはれぬ
斯くて四五里をたどる程に夜も明けぬ里に入りて洲濱は城の
噂やある落人に目をさむるものやあると心を配れど片田舎の
さる噂だにあく昨宵の落城を知れるものもあき様あるに心を
安んじとある農家にたよりて草鞋を買求めて穿き又怪しの管
笠を求めて姫に打被せ藁金剛を求めて穿かせあさし麥の飯を
求めて食し姫にも勧めたれど姫は拵々しくもまぬらす洲濱は
知邊ありと見え是より美作路へ赴むくべしとて姫を扶け引き

て往くに姫は必進まばこそ足の歩みは引かる、儘に前へ運べ
ど必は裳抜のから衣うつり換れる身のさまと啣ちあがらも往
く程に中一日を経て備前美作の境異島の山越して茅部野とい
ふへ掛りしは日も早や暮に近づけど里ある方へ近づかず旅に
習はぬ姫が身には必細さも彌勝り四邊見らる、折こそあれ往
手に茂りし木立の間より野伏と覺しき一群の者共あらはれ出
ぬ

(十)

女性を伴ひ夜陰の旅行大膽あり我々が此原の國守たるを知
らざるや生命惜しくば貢物として路金を出せ女性を我等が手
へ渡せと口々に呼はり野伏らは太刀及の鞘を外して群々を走
り寄つて往手を塞ぐに姫はあやと膝消えて流石に今は頼母

しき洲濱の後へ身を匿し夢幻の境を分す顔き居たり洲濱も今
は絶体絶命逃ぐとも如何で逃るべきと思へば腕の續かん限叩
き散して見んと物をもちはず太刀抜き翳して先に立ちたるを
目掛け斬つて掛れば野伏らはソレと互ひに聲を合せ洲濱を押
取圍みて烈しく斬込むに洲濱は身一つにして五六人に涉り合
ひ其上姫を氣遣へば進退至つて難儀あり其中に二人の野伏は
矢庭に姫を鷲攫みにして山路の方へ馳往きけり今迄洲濱に伴
あはれしを夜叉の懷裏に在る心地せしが今はそれにも幾倍ま
して虎の額へ落ちたる思ひに姫は臆魂魄も身に添はいこそ佛
名さへも稱へ得ず憶々と攫まれ往きしが幾町を來りしやらん
二人の野伏は此處らにて一休みせんといひて姫を道のほとり
に置きつゝ一人のいふ夕暮あれど定かに見き御年も最と若う

して御姿尋常ならずイテ御顔を拜まんと顔さし覗けば一人も
 差寄り我にも拜ませよと先あるを押退け差覗き實にも美しや
 美しや世の中にはかばかりの人もあるものか斯ばかりの人を
 伴ひたる彼の旅人は何者ぞ心憎き限ありそも君の契らせ給
 ひし殿は如何ある殿ぞ心憎や心憎やと呂律を亂して鬚斑ある
 頬差寄すれば一人が又押退けて立換り我は旅人より我々の頭
 領の果報が心憎きよ斯る美しき上臈女房を伴ひ歸らば差詰
 め今宵より頭領の奥方我々は相伴もありがたしそれを思へば
 部下には何がある責て今の間に御伽羅の香ありと賞断をした
 きよとしまだれ掛る姫は初より彼等があすに任せてありしが
 此時やうく人心地づき屹度思案をするに怖ろしさも淺間し
 さも死すれば夢と消ゆるあり先に死後れて洲濱に伴はれ來

たればこそ斯る悲しき目にも逢ふあれ今は此身の死すべき時
 期あり唯如何にせば死あるべきか悲しき時に死あれぬ程口惜
 しきはあしと四邊のさまを見廻せば此處は山岨の細徑にして
 日は疾くに暮れたりと覺しく月はあれども木の間にくれに光
 薄く確とは見えぬぞ前は千仞の谷に臨みたりと覺し情は風竟
 の處あり此谷へ飛入らばささて死あれぬことあるべきと心を
 決め餘念もあくしまだれ掛る野伏を左右へ突退け閃と身を躍
 らして谷の中へ入りしが底も知られぬ谷あれば忽ち人心地
 を失ひひけり
 姫上々々と呼はるゝやうに覺えて目を開き見れば夜は明けて
 日影麗らかにさす溪川のはどりに身は人に抱かれて在り忽ち
 ち昨宵の事を憶ひ起して今抱かれたるも若し其群かと其顔を

仰ぎ視ればむさくろしき野伏に引きかへて山寺の稚兒さんど
 かど覺しき容顏美麗の少年あり姫が正氣づきたるを見て美少
 年は莞爾と打笑み、姫上御心地儘かにあらせられたか。と言
 掛けたる愛嬌其口元其眼元總体の面差覺えあるやうに覺えて
 姫は情々打まもれば夢か幻か辰丸様か。姫上。オ、懐かしや懐か
 しや。不審き對面御座りまするナア。

(十一)

言はれて見れば不審しやそも御身は妾ゆゑに出家し給ひしと
 聞へつるが其後此處らにかはせしや若しや妾の戀ふ心に
 んどの魅入れしにはあらざるか但しは妾は既に死して冥土で
 御身に見ゆるかさすれば御身も亡魂か喃辰丸さま此いぶかし
 さを晴してよと顔シロくど打まもれば辰丸は抱きたる手を

解きて姫をほとりの石の上に居らせ其身は引下りて悲々しく
 一禮し姫上誠に思ひ掛す見參に入まぬ辰丸はのたまふ
 如き狐にも亡魂にもいらはず不審きは辰丸よりも姫上の此處
 らへわたらせ給ひし事あり如何ある仔細ありて此のわたりへ
 はおはし給ひて斯る谷底へ落入たまひし御身一つにてはは
 じ定だめて具しまぬらせし人あらんそれがし中島の御城を出
 し時近きに和田ある洲濱殿へ御興入あるべしと承たまはりつ
 るが其方さまの人々が具しまぬらせ來りしか如何ある災難に
 出逢ひ給ひて其の人々にも離れ給ひし其の人々は如何にせし
 良人の殿もわたらせ給ひしか。と問はるゝに往事の憶ひ出られ
 て姫は悲しく口惜しく辰丸の懐かしさへそいろ勝りて涙と
 俱に先頃辰丸に詔書を贈りて返事のあきば胸安からず辰丸が

出家せんとは思ひも寄らねば婿竹と啣ち暮し待明かす間に思
ひ掛す今日し和田へ興入と聞くに胸は潰るれを父母の仰のも
どきがたさに心あらずも洲濱へ嫁ぎ初の程は婿竹と吉合せ病
痢と偽はりて我のみ立つる心の操其人には知られずとも辰丸
あらで身を任せじと佛神へまで怒ひしも云々の苦しき事情あ
りて斯くと語るも面伏あがら操を破りて良人の心に従がひし
にそは腹黒き良人の計略にてそれより事起りて中島より夜討
せられ自殺して良人と辰丸二人へ一時に操を立んと思ひしに
それさへに止められいふせき良人に伴あはれて此の美作路へ
落ちたるに昨宵また野伏に出逢ひて良人の生死も知らず斯く
の有様と戀も悲しさに打消されて取かしさを打忘れ辰丸に
別れて以還ありし始末を物語れば辰丸は聴く事ごとく驚ろき

居たるがやうやくに拱たる手を解き辰丸父に透はれて此美作
の山寺に日頃歴たればさることありしをば盛も知らず今朝は
吾寺の前住ある上人が此の谷蔭の草庵に隠居しておはすを訪
はんとて寺を出此の處へ來掛りたるに此處らに見慣れぬ女性
の倒れ居るを見て女人の肌は手を觸るゝは僧家の堅く誠むる
所あれぞ見過しがたさに近寄りて介抱すれば顔貌に見覚えあ
り尙能く見れば紛ふ方あき姫上あるに驚ろきて呼活まぬらせ
斯く不思議の對面をあしまぬらせしも盡ぬ御縁とすすべし此
上は師の坊の草庵へ伴あひまぬらせ兎にも角にも御身の上を
師の坊へ頼み聞え便につきて中島へ送りまぬらせんといふに
姫は嬉しく涙のまゝに莞爾と笑を浮べし面ざしは驟雨の間の
夏の月きらめき出たる如くありモヲシ辰丸様御身は嘸憎う思

し召ませうナア。ソリヤ誰を此の初音を。勿体あや何故に。妾が書
書を上げたばかりに御身の上へ濡衣かゝり父御の勘氣を受た
まひて心にもあく山寺の御稚兒におありあされた故。ナンノそ
れを恨むべき辰丸とても木竹の身にもいらはず御心には從が
はね姫上の御心根はお婿しう存じました。アノそれは誠で御
座りますか。佛神冥利主君の姫上に偽は申しませぬ。辰丸様妾は
最早や中島へは歸りたる御座りませぬ何時々々送も草庵とや
らへお置きあされて下ださりませ。イヤ、それは認ひませぬ。
それは何故。僧家に女人を置くことは堅い誠師の坊が承知はあ
されませぬ。女でも出家して尼にあれば御寺に居ることが協ひ
ますか。ナニに。妾は尼にありましても御身のお側は。姫上、姫上
には婿君がおははずでは御座りませぬか。ハア、悲しや如何にも

左様仰せられ、ばいぶせきあがらも良人は良人アノ女の操が
立つまいか。人あき處に男女二人李下の冠瓜田の糠片時も早く
草庵へイザ斯うかわたりあされませ。アイタ、。お預づき遊
ばしたか。と走寄つて手を執る時たがひに見合はす顔と顔思は
ずハツと赤らめ合ひぬ。辰丸様。姫上。何やら身内が願へて願へて

(十二)

借ばかりある柴の扉に相應じからぬ。御姿初音姫は辰丸に伴
まはれて柳の坊の許へ預けられ草庵に日を重ねしが世を隔て
たる山陰も春は櫻に色づきて人こそ訪はね。思さましけれ。姫
の心は降積る憂苦の雪に埋もれて溪の氷の解けん。逢あき物思
ひ今迄とても一日だに思はぬ日。とてはあらずあがらも我身は
他男に逢ひぬ。其人は行方も知らず。逢道られて消息を聞かん。逢

さへあし鬼ても角ても次の世と現世の縁を思ひ断えしを思ひ
きや思はぬ災厄が縁とあり再び其の人に廻り逢ひ其人の手
より介抱受け優しき詞をかけられては又煩惱のむらゝと業
雲に鎖されて道も探も何の其の焚ゆる思ひに身も焦るゝを露
の情を受すもあらば胸に焼く火の消ぬべきかはと思ふに甲斐
なく戀人は姫の身の上云々ど庵主に聞え其身は又來んとて我
居る寺へ歸りしまゝ十日餘の今日にありても訪ひも來ず夜の
間に此庵を抜出てありと此方より尋ね往かんかと道の程寺の
名あど小法師を賺して問へば此處を距ること廿町あまり山一
つ彼方にて大慈寺とばかり小法師も常には往通はぬにや道の
險易も抄々しうは知らぬといふに心は過れど女子の甲斐あるさ
たつさも知らぬ山道さ一人たどりも往きがたく詮方あるさに甲

斐あき事を幾度か繰返しては心も亂れ斯迄戀ふ妻あるをさ
彼君のいふせく思すやらん假令御寺の徒にて法師が女子に近
づくをば禁するとも彼君はか稚兒あり剃髮染衣の姿あらねば
また五誠とやらを保たるゝ御身にもあらじ況て妾と彼君とは
主従の名あり一門の親しみあり一ツ館に生長り兄妹にも増す
交らひにて父母も一たびは妹脊の縁を結ばせんとまで許し給
ひし中あるを差程親しき中あるを法師は氣強きものあればと
てよもせかうとは仰すまじ何にも譯のあい中でも其身が助命
た女子あらば十日がうちに二度三度は音訪れても賜はるべき
をさるに一度も來まさぬは思ひも掛けぬ行掛りに妾の倒れ居
るを見て助命することは助命あがらも妾が文をつけたればこそ
思はぬ出家と其事を思ひ出て妾が憎うあり給ひしか若し然ら

んには何とせん斯る山路へ迷ひ来て知らぬ庵へ捲けられ力を
 頼むは彼君ばかりア、是非もあや死ぬより外の事はあし思へ
 ば千萬年生きたればとて思ふ事協はねば何にせん所詮彼君に
 添はれぬあらば一日も早う死るが中々願ひありトハいふもの
 既に一旦死したるを計らず其人に呼活けられて切ある思ひ
 を面のあたりに掻口説きしは薄き縁ともいひがたきに掻口説
 し後嫌はれて空しく死ぬる程あらばあのまゝに死んだが通か
 に増あるものを生じひに懐かしき人の面を見て迷ひを増せし
 は曲もあやア、天道佛神も聞えぬかさばさやさるにても妾は
 誠に嫌はれしか辰丸様は誠妾をいぶせく思すかア、一圖に思
 ひ逼りて我心から世をあぢきあむもの、先の日のか詞には妾
 をいぶせしと思すやうある節もあかりしオ、それよ妾が文を

贈りし折の志は嬉しく思ひしとのたまひしされば妾は嫌はれ
 たるにはあらぬか嫌はれぬものあらばやはか消息のあかるべ
 きに情も心得ぬ事よ但しは妾を良人あるものと思しての遠慮
 かそれあるべし妾には婿君ありとのたまひき妾と二人山路に
 居るは季下の冠瓜田の履ありとのたまひき辰丸様のか心は知
 れたり其事は妾も思はぬにはあらず心に染まぬ妹背とはいへ
 良人持ちたる女子の操ア、其操の大切あるは妾とても能う知
 れり此程までは其操を立通し縦令再たび縁ありて彼君に迷り
 遇ふとてもあまめきたる詞はかはすまじと心の中に怒ひしと
 は偽にあらぬごも端あうか顔を見ては今更に我心が我心のま
 りにあらぬを如何にせん兎にも角にも今一度彼君に見えたや
 見えて此胸の切あさを知らせたやそも彼君と妾とは筒井筒振

分髪ぶんぱつの頃ころよりして思おもひに思おもひし戀こゝろ中なかあるものを良よ人はあれきも往むか分わかれて其そのの生せい死しさへ知しられぬものを是こゝろが尋たづ常じょうの淫やん奔ぽんか彼か君きみに逢あふて只ただ一言いっご最愛さいあいの者ものとの言ことの葉はを聞きくあらば其その上うへにては良よ人ひとへの言こと譯わけに此この身みを棄すつるも惜あはれず君きみが一夜いっやの情なさけに換かて妻つまが百年ひゃくねんの命いのちを棄するものをも花はな爛らん燼せんたる窓まどの下したに經き机つゝに身みを投なげ伏ふして泣な居ゐたる折せ柄がら奥おくに手てを打う鳴なす音ねす庵あん主ぬしの老らう僧そう書しよを好このみて獨ひとりり丹たん青せいを弄もび居ゐたるが倦うみて茶ちやあきをもとめらるゝあるべじ

(十三)

小こ法ほふ師しも居ゐらぬにや應こたへするものあきには姫ひめは涙なみだの顔かほを拭ぬひて忙いそがはしく奥おくへ往むかき御ご用ようもやと問とへば庵あん主ぬしは何なに氣げあき筆ふでをといめて此この方かたを振ふ向むき、オ、姫ひめ君きみにて渡わたせらるゝか子こ僧そうめは居ゐりませぬか。ハ、誰たれも居ゐらぬ様子ようすで御ご座ざりませぬが何なに御ご用ようで御ご座ざりませぬか。妾わらわに仰おほせ聞きけられまして。イヤ差さしたる用よう事じでは御ご座ざらぬ茶ちやを持もち來こよといふ迄まであれば子こ僧そうが居ゐらなば歸かへつての上うへに致いたすさうか茶ちやあらば妾わらわが汲くんで參まりませう。イヤ、それには及およびませぬそは兎うも角かくも姫ひめ君きみの御ご身みの上うへは先に辰たつ丸まるが物もの語かたにて大おほ略りやくをば聞ききたれど未いだ詳こまかるとを聞きかず殊ことに老らう年ねんの物もの忘れ早はやく聞きつる事ことも膝ひざ臆おそ氣けにありぬ何時いつぞは面おもてのあたり聞きまからせんと思おもひしが小こ法ほふ師しも居ゐらぬとは好このき機きあり此この方かたへ進すすまれよといはれ姫ひめはウツ、給たま具ぐ皿らの錯さく落らくたる中なかへ坐まを占しめぬ老らう僧そうは笑わらひげに、先まにも略りやく聞きぬ御ご身みは備び前ぜん中ちゆう島しまの城じやう主しゆう金きん川せん殿てんの姫ひめ君きみにて近ちかき頃ころ和わ田でんの城じやう主しゆう洲しゆう濱はまとやらんへ嫁よめぎ給たまひしとや。仰おほの通とほりて御ご座ざりませぬ。彼か辰たつ丸まるは御ご身みの父ちち君きみ金きん川せん殿てんの御ご内うちにも

りませぬか。ハ、誰たれも居ゐらぬ様子ようすで御ご座ざりませぬが何なに御ご用ようで御ご座ざりませぬか。妾わらわに仰おほせ聞きけられまして。イヤ差さしたる用よう事じでは御ご座ざらぬ茶ちやを持もち來こよといふ迄まであれば子こ僧そうが居ゐらなば歸かへつての上うへに致いたすさうか茶ちやあらば妾わらわが汲くんで參まりませう。イヤ、それには及およびませぬそは兎うも角かくも姫ひめ君きみの御ご身みの上うへは先に辰たつ丸まるが物もの語かたにて大おほ略りやくをば聞ききたれど未いだ詳こまかるとを聞きかず殊ことに老らう年ねんの物もの忘れ早はやく聞きつる事ことも膝ひざ臆おそ氣けにありぬ何時いつぞは面おもてのあたり聞きまからせんと思おもひしが小こ法ほふ師しも居ゐらぬとは好このき機きあり此この方かたへ進すすまれよといはれ姫ひめはウツ、給たま具ぐ皿らの錯さく落らくたる中なかへ坐まを占しめぬ老らう僧そうは笑わらひげに、先まにも略りやく聞きぬ御ご身みは備び前ぜん中ちゆう島しまの城じやう主しゆう金きん川せん殿てんの姫ひめ君きみにて近ちかき頃ころ和わ田でんの城じやう主しゆう洲しゆう濱はまとやらんへ嫁よめぎ給たまひしとや。仰おほの通とほりて御ご座ざりませぬ。彼か辰たつ丸まるは御ご身みの父ちち君きみ金きん川せん殿てんの御ご内うちにも

重臣にて一門たる人の子息併も一人子とかや聞きつるに近き
 頃此山中ある我寺へ托けて往々は出家をもさせんといふには
 仔細ぞあらん御身は其の仔細を知りておはさば愚僧に語りて
 聞せ給へといはれて姫は胸踊るさ情は此御坊妻と辰丸様のお
 事を豫てより知りてやおはす此程よりの氣色に推し給ひしか
 事そ云々と打明けおは晴て彼君に逢はるべきか但しは却て悪
 かるべきかと取つ置つに應も出ず老僧類に促がすに處を結て
 アノナ其仔細はナ。其仔細はナ。アノナ。其仔細は。妻は一向に存じ
 ませぬ。ハテ知らぬとあれば是非もあゝ其事は尋ねまじ御身と
 辰丸とは主従にもあり一門にもあり親しみはさるべきことあ
 がら尋常に増して親しげあるは幼き折より睦み合ひ給ひしあ
 らんと思はるゝが如何にや。ソレハナ。それはあの辰丸様と妻と

は主従といふは名ばかり妻が父上と辰丸様の父御とは従兄弟
 とやら再従とやら至つて血筋の近い一門家の子分では御座り
 ませぬそれ辰丸様は襦袢の中から母御にか離れおされた故
 妻の母君が呼取りて妻と一つ館にてお育ておされたれば互ひ
 に十二三の頃までは一つ處に起居し姉妹事やら雑遊びやら種
 々の遊戯がそれはく面白いくことで御座りました。オ、さもあ
 らんさもあらん年といひ容姿といひ似合頃ある御身と辰丸何
 故妹背の縁をば結ばず他家へ嫁入めされしぞ。サアそれには種
 々苦しい仔細あつて辰丸様と夫婦にあれば何程か嬉しうあ
 らうものをモチシ御坊様へ伺ひまする辰丸様は何でも御出家
 遊すので御座りませうか。さればあり父の云附といひ辰丸も次第
 に寺に馴るゝに隨がひ菩提の道の尊きを知りて此頃は行道至

つて堅固に行末は天晴大徳とあるべき望みあれば退附判髪さ
 する等。エ、あの美しい黒髪を。其の驚ろきは何故ぞ。父母は斯れ
 とてしも鳥羽玉の我黒髪は撫ずやありけん掛換のちい一人兒
 を出家さすは父御の御本意でもあるまい辰丸様も武家に生れ
 て言甲斐あう法師にあるが嬉しうも思すまい辰丸様の御出
 家はほんの一時の行掛り枯木のやうな御出家で一生を過させ
 ては辰丸様へ妾が濟まぬ何時までも俗の妾で奥様をもか持ち
 遊ばすやうな勸めあされて下さりませ。辰丸が一生法師であれ
 ばとて姫君が彼に濟まぬとは心得がたき事あり何か仔細もあ
 ることか。サア其仔細は辰丸様が此御寺へか越あされた原因と
 いへば妾ゆゑ。御身が悪想せられしか。アイナア。

(十四)

姫君は今も尚ほ辰丸と妹脊の契を結ばんと欲がひ給ふよ。ウ。
 何うしてそれを御存じで仰の通り辰丸様と一生が協すば一日
 ありとも妹脊の契を結びたくそれもあらずば後世にての一ツ
 進に住しめ給へと朝暮御本尊への願言も其事ばかりで御座り
 まする誠や思ひ中にあれは色外にあらはるゝとかや思ひに思
 ふ心の色が包むとすれど見えませるかや。さればよ御身草庵へ來
 ましたるより二日三日はさる様も見えざりしが日を経るにつ
 れ何とあう勝を勝ある色見えて昨日に今日と通り來ては唯嘆
 息に明し暮し顔に涙の痕繁く三食さへに抄々しうはまあり給
 はぬ様あるは紛れもあらぬ物思ひ勿論一城の主たる大身の奥
 方が家を失ひ城を逐はれ知らぬ旅路に彷徨ひて頼む良人に
 往き別れ不幸に不幸を重ね給へば身に積む憂に細り給ふはさ

るべき事ありさりながら御身の物を思ひ給ふは其事あらで外
に在りとは六十年來世の中に戀てふものゝあるをも知らぬ老
法師の目にも能う讀まれぬ如何に姫君老法師が見るところす
分違ひは御座るまいが。サア其やうに何事も御存じの上は包
みませぬ御坊様のか情で生命をかけたる戀中をか結びあされ
て下さりませ活佛様と拜みまする。否とよ夫は驚ひやさぬ。あら
ぬとは何故に。一城の主ともいはるゝ人の姫君たる御身に
斯ばかりの道理があさくらぬとは是非もさや別れて生死
が知れぬにもせよ正しく御身には良人あるにあらずや女子た
るもの一度人に嫁ぎては縦合臥床を共にせぬ間に其良人死す
るとも再び他男に見えざるこれを女子の道といふある況て
や其良人未だ死したるにも定まらず同じ禍厄に出逢ひて別れ

て未だ日も歴ざるに早や他男に契らんと思ひを通はすことあ
らんや思ふに離れ思はぬに添ふそも昔夙世の縁あり苦しき事
情に迫られて心に副はぬ人に添ふとも良人と頼まば妻たるの
道を盡さいらめや良人あき頃より戀渡りたる男子ありとて良
人の外に情を通はすは是れ夫を重ねるあり佛神の咎めは免れ
がたし幸ひにして辰丸は男子甲斐に此の理をあきらめ知りて
御身を我に託けし日より曾て草庵へ訪も来ず今迄は日毎に來
りしを斯くするは御身の其身を戀ふを知りてわざと煩惱の絆
を断せんと計るあり辰丸にして此心あらざりせば御身は疾く
に失節の婦人となりて辰丸は五誠の一を失ふはんア、危いか
あ危かりし今の間は煩惱を晴し給へよ。サア其の運は妾とても
皆能う知り良人に濟まぬも道に背くも能う知りながら思ひ

切られぬ身の因果ア、是も夙世の縁ではあるまいか御坊へ願
ひまぬらする縦令さらば妹脊の契を結ぶまでは協はずとも今
一度辰丸探に逢させてたび給へ今一度か顔を見て不懲の女と
の御詞ありと聞くあらば其一言を思ひ出に乘つり思ひ切ます
るそれも協はぬものあらば思ひに死あん妻が身は未未劫妄
執の雲に障られて無間の谷へ沈むべしをしも救ひ給はぬが
佛の道かあはれ御坊大慈悲を垂れ給ひて唯一目彼君に逢はせ
て賜はりませ。イヤとよ一目顔を見れば尙は妄執は増すべきよ未
來を語る迄もあし今しも御身は現世無間の谷にあるものを出
離解脫は今の程あり疾く迷ひを晴し給へよ若今の儘にて迷に
迷を重ね往かば遂には正氣を取乱して物に狂ひ給ふべし。愚あ
り御坊狂氣にあるは物かは此戀には生命をも掛けたるものを

所詮協はぬものあらば女の一念鬼とも蛇ともア、妻はある必
はあらねど此一念が鬼とも蛇とも生を變へて辰丸探に附纏は
らうよ。
涙墮ち聲頭ひ花の顔殺氣を含みて物凄さに老僧屢々歎息し、是
非もあき迷ひかあざらば辰丸をまぬらすべきよ。エ、アノ辰丸
探をされど生ある辰丸をばまぬらせ難し我が年來書術を曉せ
るを幸ひ辰丸の畫像を作りてまぬらすべし色即是空々即是色
人豈に百年の壽をのべんや顔能く幾歳か紅あるべき郊野に聚
らるゝに及びては誰か一人枯骨とあらざる此時に至りて頭を
廻しあば生ある人と壽中の人と果して幾何の逕庭かある此道
理をあきらめて煩惱の絆を断ち給へ御身の着たる白小袖を脱
ぎて我に取らせよ其裏へ畫像をかきてまぬらすべしを断す

肌に着けそれにて煩悩を散じ給へイア
前に御身の慕ふ辰丸をまからすべきにアノ書にかいたをかへ。

(十五)

山寺の鐘今日も暮ぬと告渡り落花を誘ふ春雨のふるき軒端に
音づれて四隣も遠き庵の中夜は殊更物淋し主人の老僧は晝の
うちより本寺へ所用ありて出往たるが未だ歸らず留守するは
所化の若僧と十二三ある小坊師と唯二人のみ團爐裏のはとり
に居並びて焚火寂しくつくねんと庵主の留守の絨伸し湯釜に
たざる湯の音に夕の讀經を打任せ壁に捺したる影ゆらく
居睡の外餘念あし初音姫は最を淋しき孤燈の下に一人雨の音
を聴き越方行未思ひ詫び我身此庵へ來りしより身の要事日月
日の數も忘れしが僕あふれば早や二十日あまり春も既に暮れ

に近し此雨にては庵主が秘藏の花も青葉と變るべし花誘ふ嵐
の庭の雪あらでふりゆくものは吾身あり思へば早晚花散りて
途には昔の下に入らあん庵主の僧ものたまひき人百年の壽を
しと假令百年の壽を全うしたりとて腰に弓を張而に波をたへ
へては何か樂しがるべき百年に一年足ぬ九十九髪其の九十九
髪纏れ亂れし胸の迷ひを花散らぬ間に解くよしもが庵主の
深き情にて手づから畫き賜はりじ彼君の姿ばかりは此處に
れど心は藻板の唐衣肌に着けても煩惱は尙ほ彌増に募るのみ
ア、誠の君に遇ひたやと思ひ詫ては又幾く涙や今宵の雨とあ
れる雨や此人の涙ある庵も浮と危まる突然出て後より情と寄
るは、ヤア所化の御坊出家の身にて戯れも事による退き給へど
突放せば圓き顔を撫廻し戯れとは恨ぞや我等只今墮落いたし

た。それは何故にエ。姫上に戀慕してエ、我らはしい五臓を保つ
 出家の身で女子に戀慕とは何事ぞ但し佛の誨へに何ぞ其のや
 う事があるかや。イヤあるとも、
 肝心要佛の本元無漏地よ
 り無漏地へ通ふ釋迦さへも羅猴羅の母は在とこそ聞け我朝に
 ては書寫の性空室の津の遊君に契り西行江口の娼婦に落る情
 あり男と名に高き武藏坊辨慶さへ一度は人道に通じたと聞く
 況てや我等味憎摺坊主一度や二度の墮落をば佛も至極道理と
 大目に見宥し給ふべし唯怖しきは庵主の目玉それゆゑ御身が
 來ませし日より我等早や疾く墮落したれど今日まで何喰はぬ
 顔をして待ば甘露や甘茶湯其甘茶湯甘からぬ粹をお釋迦の引
 合せ今宵庵主の戻らぬが我等が爲には放生會コレ拙僧の耶須
 陀羅女此間に一寸涅槃の床へ何うぢや何うぢや其やうあること

聞く耳は持たぬ。ナニ聞く耳を持たぬ無情ぞや無情ぞや先づ其
 身に引較べて戀する心を悟り給へ御身があの辰丸に戀焦る、
 も戀我等が御身を慕ふも戀々といふ字に二様はあるまい又辰
 丸が男子あらば我等とても男子男子といふに二様はあるまい
 此の理を會得せば少々男振は下品でも我等ありとて憎うはあ
 るまいアイマ、、手厳しいことをし給ふよコレ二の腕が紫
 色だ。ナンノ此上にも狼褻を振舞せば紫色はかろかあること魚茶
 色にした上に庵主様へ知らするぞへ。エ、庵主に知らされて溜
 らうか庵主の居らぬが此方の附目。庵主は居らすと大きき聲し
 て小坊師殿を呼ぶぞへ。イヤ子僧めは腫りこけて踏こくッても
 正氣はつかぬ聲を舉げて逃廻りても脱目の皮ぢや。と大手を
 廣げて追廻す袂の下を搔潜り竹椽傳ひ庵主の居間へ逃込めば

何處へ何處へと追ふて出る様の人影も子の兎と走寄ば目先へ
閃めく氷の及や盗人ぢや悲しや悲しや。

姫は辛うじて所化の手をば逃れたれど盗人入り來りあは如何
る愛目に遭ふべき何れへか暫時身を匿さんと見廻せば庵主が
平生絹紙あぞ入置く古葛籠あり是屈竟と中ある物を取出し其
跡を身を潜め蓋をかつて匿れ居る稍ありて盗人は其處ら一
遍あさりしかどもさせる得物もあかりけん二人計りの足音し
て此室へ入來たれば姫はスハヤと息を殺して戦き居るうち何
事か細説く如く聞えしが葛籠は何時か人の背に上り行手も知
らず負はれ往きぬ

(十六)

姫は唯夢に夢見る心地あり固より東西も知れされば草庵をそ

こばく距たりたるやも知れず怖ろしさにうつらくと負はれ
往きしがやうやくに心を鎮めて思ひ付るに既に盗人の手に落
ちたれば往先も知られたり愛目に遭はぬ先葛籠の中にて自
せんと既に一たびは思ひ決めたれど平生嗜み持ちたる七首
も流浪の身とありて以て還は懐にあらす咽喉を突かんも協はね
ば舌を昨んと思ひしが其期にありては流石生命のかあしさに
越方の事種々と思ひ出吾身如何ある前世の業因にて斯く數々
の愛事には遭ふやらん世は儘あらぬものとはいへ人の身には
佛神の加護といふこともあるべきに神も佛も吾身をば見放
うたまひたるか戀といふこと知らぬ間は戀人の側にあるが
ら戀知初めし日より戀人に引離されて思ひも掛けぬ人に嫁
其後は彌が上に悲しきとのみ重なり來て會々戀人に逃り遇ひ

ても心の丈を啣もやらす今又かゝる災星にいであひて生死の
迫戸に逼ること後世の程も思ひ遣られて覺束あしそも日頃よ
り心さま正しからざる事ありて斯く災星の重きあり來るか道に
背きし舉動ありて佛神には見放たれしか良人ある身にて他男
を戀ふて道に背けりといはいはいへ彼君の事は良人あき日より
思染めたるあり罪とはいはいへ佛神も見宥し給ふすべあからず
やあど半は懺悔をあすにつけても只管に辰丸戀しくあり如何
にして今一度生命のうちに見えばやと又未練の心出來て兎
角落着んとところまで往き其上にて死ぬるとも運からじと心を
決めては怖じさも次第に薄らぎて唯命を天に任せて負れ往ぬ
姫が斯く兎さま角さま思案の間も盗人らは更に歩みをとめ
す何事をか小音に語らひつゝ、小雨を胃して往と往く程に幾町

の道を歴しか知らず稍久しき時をたどりて其の樓閣へ來り着
きしにや葛籠をドツカリと下せば留守せしものと覺しく、音
惣六戻りしか無漏れつらん獲物は如何に疾く足を溜ひて衣を
焚火に乾かせ。あど最と鈍たる聲にていへば姫を自來りし二人
の盗人聲を齊しく、頭領無寂しくかはしけん誰々もまだ歸り來
ぬか我々二人は最と珍かある獲物して歸りし。あどいふ珍かあ
る獲物とは錦襦の織物か珠玉か何にてもあるれ汝らにも分ち與
ふべし疾く我に見せよ。といふはしに二人も足を溜ひて霞の上
へ押上り、否とよ是は分たるべき品にあらず、但し他品の例によ
りて少ありと願たれば我等も此上あき幸ひあれ品を見ら
れあば吝うありて所詮願たる、事にはあるまじと二人齊しく
諸手をかけ蓋搔除くるを青鷲の土鱒を狙ふ如く頭をのばして

差覗き、イヨウ此處らわたりに見も馴れぬ上臈の顔は見えぬ
 衣の模様髪の勾はしき逸物に究まッた疾く御顔を拜まばや
 イザ此方へ、と手をとれど姫は其手を拂ひ退け首を俯して見も
 やらぬを三人にて手箆に載せ扛出して園爐裏のほとりへ振へ
 頭領と呼ばれし賊は横より縦より姫の顔さしのぞき、アモ誰は
 しき御顔ばせ是は如何さま顔ちはあらぬそも汝らが日頃にあ
 き大手柄斯る獲物が如何にして手に入りたるぞと問へば、され
 ばあり今宵は何處をあさりてもさせる獲物のあらざるに寺あ
 ぞへ押入らば少しは獲物もあるべきと只ある草庵へ押入しに思
 の外ある貧寺にて品物とてはあらざれど寺に似合ぬ此上臈を
 瞥と見たり是ぞ金銀珠玉にも増す重寶頭領定めて悦ばれん
 と跡をつけて奥へ往けば何時の間にか匿れたりハア何處へか

と見廻せば頭匿して尾を匿さず此の葛籠の中へ潜みたるが小
 袖の端が蓋の間より見えたれば屈竟ありと其まゝ負ひて歸り
 來ぬ。借は法師の嘗物かざるにても納豆臭味あきか上臈法師は
 らの慰物にあるよりは我内室にあり給はい腥き物もまわらす
 る灘の酒もまわらす衣は亡者の布施物あらで生たる奴のを
 引剥取り好み次第あるをまわらすれば遙かに増して樂しかる
 べし懼れ給ふ事はあしほとり近う寄り給へ御顔を上げ給へヤ
 ヨ當吾物六酒の用意をせよ上臈と婚禮の盃事をあすべきとわ
 さくとして老實ぶりあり

(十七)

姫は眼を偷みて四邊の様を見るに家はさまで荒れたるにあ
 らねど甲冑のちぎれたる鏽鎧太刀刀弓矢あんど其處ら一面取

散し其中に酒既さほどの立雑りたるさま實に盗人の棲所あり
既にして二人の小賊が酒を温め肴核を調理するに盗み來りし
物あるべし高蒔給せし塗膳の燦煥あるに烟鍋は口の缺けたる
土瓶を用ひたるを調度の不整頓斯る雜儀の中あがら一笑を
催はすべし肴核は野雞山鳥兎さほどの山の物を一つに大鍋へ
切込みて蘿蔔と共に煮たるあり斯る事を見馴れぬ姫の身には
最さいぶせさ勝りけり頭領と呼ばるゝ賊は土器取上げ一つ飲
み、ヤヨか上臈一つ開しめし給へ深く好ませ給はずば唯一つ乾
し給へ一つがあらずば半分ありと乾し給へ此土器が夫婦の堅
め今宵を千夜の始めあれば未永う最愛じみまぬらせん情を知
らせん爲御身の飲さしを我飲むべし。と土器をさしつくるを姫
は應もせず拂ひ退くれれば滑り落る土器を又取上げて苦笑ひし。

備は酒は好まずとか好まれずば是非もあし我等一人で夫婦の
堅めは異あものあれを一つは御身の分として飲べしドリヤ此
の土器はか上臈の分よイヤ旨いは旨いは甘露のやうぢやを備
今度のはか上臈より我等へ賜はりたる盃オット、ト、是も旨
いは五臟六腑へ染渡るやうぢや盃事は我等一人で引受けても
此外に尙肝心の夫婦の堅めは喃か上臈御身も心がましませう。
と獨機嫌に戯むれつゝ小賊を相手に酒酌替すを姫は唯音を垂
れて見もやらす斯る折柄手下の小賊又二人何處よりか歸り來
りしが此休を見るより忙がはしく足を濯ひて霞の上へにじり
上り是は頭領恐悦千萬何處よりして斯ばかりの辨才天女が此
家のうちへ天降り給ひたる我々は宵の間より此の夜深まで泥
草鞋の底を摺減して近郷近村をあさり廻はれを今宵は取分け

造化悪く衣を濡して濡鷺の土躰も取得す歸り來しに頭領は坐
あがらにして花にも増せる上臍を何處よりか得給ひたる諸
やまし。と追従すれば此方は最を笑しげに、汝らは夜一夜あさり
て小袖一つ得て歸らぬとあづも働きのあき奴らよ、よし、今
宵は働あしとも喜酒を飲するぞ忝なくも勿体なくも是にまし
ます上臍は今宵よりして身の内室辨才天女のやうにましませ
ども生て御座るを塑像ではあいなまだ物とてはのたまはねさ
往々打解けて身がことを最愛しいとのたまはんとぞ御面相だ
けは汝らにも拜まする心置あう拜め。とて土器を取らすればさ
らば我々も此の土器にあやかりて室津わたりの遊女にありと
持囃されんと迷互に引受け引受け飲みあがら姫の顔を眺めた
るが二人面を見合せて何事か驚ろけるさまあり頓て一人が頭

領のほとりへ膝を前ませ其耳へ口を濫て何事か囁やけば頭領
も太く驚ろきたるさまありしが暫時思案してニッコと打笑み
誰が物ありとて此期に及びて我が物にせであるべきやよし
彼らの歸らぬ間に夫婦の堅めをすべし汝らは此處で思ふま
飲め彼が歸り來ともかまへて奥へ來さすあイヤか上臍は身
共に此方へおはせと手を取れば振拂ひ、妾を殺せ和主らの心
は従がはず。ヤア心強きことをのたまふよ我等が斯迄最愛しむ
にか上臍にはまだ不足か不足とあらば今一入最愛しむべき方
法あり兎にも角にも此方へ來ませ人の情をもさき給ふあヤコ
來ませ手をとりてまわらせん耻かしくば抱きて伴あひまぬら
せん我等が顔に笑渦ある間に従がひ給へさあくば痛き目をし
たまはんに痛き目が怖ろしとて和主の心に従がふべきや兎て

も角ても和主らの手に落ちたるが妾の不運生命はあきものとあきらめたるぞ疾く殺せ。イヤ殺すまい殺して何の樂じかるべき殺さぬかはり引括つて本意を遂るぞと袖捲り上げ立掛る此時遅く彼時疾く一個の手裏剣何處よりか飛來りて頭領の肩にクサと立つ是はとかあぐる間もあらせず表戸踏破り飛ぶが如く躍り入りし一人の男大太刀振閃めかして頭領の首をはたと打落せばイヤ狼藉と手下らは騒ぎ立ぬ

(十八)

ヤア狼藉とは事可笑この女性是我妻あり妻を捉へて調戲者にせんとする憎くき白痴眼前に斬棄つるに怪しうはあらじ汝らとても烏合の盗人一旦此の白痴を頭領と感きたりとして講第の主といふにもあらじ今より心を離して我に従がへ一言にても

否といはい即座に首を刎ぬべきぞ我手並は知りつらん。と大太刀を眞額に振翳して屋内も震動するばかり高く叫はる勢ひに呑まれてや四人の荒男面見合せて黙然たりしが頼て一同彼の男の前に平伏し仰せ一々理あり我々が騒ぎ立しは全く敵對せん。とにあらす事の不意に驚ろきて一時度を失ふへるあり今日よりは前に従がひ殿を頭領と仰ぎ奉り長く御手に属がふべし知らせ給ふ如く剪徑押入何にても盗人一通りの業には馴れたり何事にまれ使はせ給へと口々に述にける此方は左もこそと氣色を直し頼の承引祝着せりさらば今日より我汝等が主となりて今迄に變るとあく盗人の業を勵むべし頭領と部下は魚と水との如し互ひに合体協力せざれば大きな仕事はあし難し汝らも能く勤めよ今にも残る奴原歸り來んに此旨を告知らす

八十
べし若し従がはぬ奴あらば汝ら我へ奉公の手始めに斬殺して
忠勤をぬきんでよ。といふはしに五六人の小賊ドヤくと歸り
來りしが固より義も忠もなき白痴ども仔細は門にて開けり
て一も二も亦く新頭領を御大將と崇めける先より事の様の荒
まじさに姫は片隅に縮みてありしが徐やくに垂れたる首を舉
げて彼の新頭領を見れば思ひも掛けぬ洲濱ありけるアチヤと
胸は潰れあがらも此場の事情流石に地獄にて佛に遇へる罰
さにあらず吾良人かと走り寄つて取違れば洲濱もオ、赤音危
かりし。と背摩撫り、猪も御身は千尋の窟底へ陥たりと聞つるが
如何にして生命全たう居給ひし。と問ふ吾良人は如何にして妾
が窟へ陥たるを知り給ふにや。さればあり其折御身をさらひ性
さしは此處に居る部下の奴原あり我も其時此奴輩に取込られ

防戦に手を盡せしが固より手に立つ奴原あらねば手痛くこれ
を切靡しに彼等は手に餘ると見よりも弓矢にて取圍み降参せ
ずば遠矢に掛けて殺さんといふに詮方なく及を収めて假に彼等
と和談するに今がた我斬殺せし頭領ありしもの言ふ我夥伴に
御身はどの武邊者あし如何で我夥伴に入給へど折むるに我も
情々思案をするに軍敗れ城焼かれて知るべき領地も亦く歸る
べき家も亦く暫らく彼等がいふまゝに其夥伴に入て時を待つ
べしとて遂に此樓家へ伴あはれて今日迄も此處に居り御身の
成行も攫ひ往し部下の歸り來て物語るに知りて痛ましく口惜
しくは思へども詮方なく黙止したるが生命愛たくまじまし
て今斯く思掛す選り遇ふこと是に増したる喜あし。猪は吾良人
は今日迄盗人の群にかはしたるか。如何にも今日より後も此怖

ろしき人々と共に盗人の業をし給ふ御心か。さればよ外に是ぞ
 といふ生業も思ひ當らねば。假にも一城の主たりし御身が如何
 に軍に負たればとて盗人に落たまふとは能うも能うも御心根
 が腐りしものよ。されば我とても盗人を快とも思はねき。差當り
 身の置所なき當惑に假に身を寄せしのみ何時まで斯る小盗人
 にてあるべき所詮盗人とありし上は益々手下を招き集へ金銀
 財寶を盗み貯へ近國の動靜を伺ひて往々は一城一郡をも盗取
 り其時こそは御身は元の夫人これに居並ぶ手下らは國老侍大
 將何と樂いことではあいか。と聞ば聞く程興醒て疎ましさ彌勝
 り良人の顔をつれくと打眺め喃吾夫其探る道あらぬ樂しみ
 は妾は願はしう御座りませぬ今日より盗人を清潔とやめる途
 は侍らぬか。さればのう盗人をやめては差當りて無身を養ふと

協はねば。妾も由ある武士の娘盗人に養はれんとは思ひませ
 ぬ。シテ養はれずは何とする。潔よう自害致します。何と。サア
 先頃落城の其折も自害に果んとせしを吾良人理あく止め給ひ
 其まゝ運て退き給ひし故力及ばず伴はれしが過世の業の拙
 あくて彌嵩み來る災罪に吾良人にも引離れて其後も自害せん
 と思ひしは數多度今宵も既に死を決し邪見の劍の露と消んと
 思ひ決めし妾が身盗人の妻と呼れてまで憶々と存命んとは思
 ひ侍らずサ吾良人御返答は何とで御座ります所詮盗人はやめ
 まじと仰せ切らせ給ふが妾の斷末間で侍るぞへ。

(十九)

イヤ、それは餘りに強面初音イヤ、奥能う物を思ふても見
 給へ我不肖ありといへども居城あり領地あり家の子數多きを

ひてもとの如く不足なき身ありせばあど盗人の夥伴に入るべきを城を奪はれ領地を失ひ一城の主ともいはれしものが邊も定めぬ草枕旅にさまよふ身となりたればこそ心にもあき盗人にもあれ。エ。サ。斯く我便なき身にありしは誰が庇ぞ。サ。夫は。御身が父の爲ではあいか。サ。ア。それは。初音さは思さぬか。そを仰せられては妾も心苦しうは御座りますれど。御身の父ゆえ斯くありし我を慙と思しあは強而ことをのたまはず行末長う我はとり居て我心を慙さめ給へや斯く盗人になり下りても御身だにはとり居らば何程か嬉しからんにヤ。ヨ。心を待給ひしか合點が往きあは涙を拂ひて今宵此處へ來給ひし來歴ありと語り給へ。ナ。ソ。あの葛籠に入られて部下らに扛れ來しとや。と言掛けて小賊等を見返り、ヤ。ヨ。汝らも改ためて見參に入れとは

身が夫人ぞと言渡せば今迄顔を見合せ居たる小賊等一同にぬざり出で姫の前に領づきたる其中にも先に姫をさらひ往きたると今宵姫を負來りし四人の者等は進み出、か内室知らぬことて我々は無禮あることを致し居りました。と面ろびに打詫ぬ。諸も初音姫は掻口説く洲濱が心の慙さに一旦は心を思ひ止まり其心に從がひて此の孤屋に賊の内室刑棘の垣に紛ふ花の刺に親しむ風情にて爰に數日を過したるが良人を始め小賊らが日毎夜毎の荒句當見ること聞くと胸を礙して心憂きに何時まで斯も心苦しき月日を送らん父母にも代て戀しと思ひし辰丸君には棄られつ殊更思掛す此の山中の孤屋へ伴はあれ來て月日の出入に彼方を東此方を西と覺るのみ土地の名さへ知らぬ身の今の在所を其人へ言傳やらん術なきに斯ては百年五十年

戀渡るとも夢あらで再び相見ん由あらじ又父母には此年月
假にも仰に背きしことあく心に協はぬ縁定めさへあらがはで
いぶせき良人に添臥も偏に父母の命をかしたみ何事も父母の
爲家の爲ぞと念じたる費心も仇枕寝耳に水の夜討の騒ぎ父母
良人敵味方と隔たりては良人に従ふが女子の道親里ありとて
歸省もあらず況て斯まで零落て父母の定めし良人とはいへ盗
人の妻とあり下り父母の名までを汚す身の甲斐あると縦令幾千
代歴るとても父母に合す面のあるべきや廣き世界に狭き身の
望といふもの一つもあし何を樂しと存命ふべき一旦其詞に従
がひて三日にもあれ五日にもあれ此家に足を止めれば良人
へ立る義理は濟みたり人知れず死あんと心既に定まりては胸
に愚痴の雲晴れて涙の雨も霽り往く那月の空を暗渡る初社胸

の一聲は冥土の門出をいそがすかと此夜も洲濱は小賊らをぬ
て何處ともあく勾當に出往き家内に人の居らぬを幸ひ其處ら
に狼藉と散りたる刀をあれか是かと選び取てあはや斯よと見
えげるが涼々しく思ひ定めても流石女の心脆くしかすがに長
丸戀しくて臨終の際に今一目畫像にかりと暇乞をせばやとて
彼の辰丸の姿を寫せし襦衣の小袖を脱んとて既に帯を解かん
とせし時表に人音して三人の小賊各々荷物を背負て歸り來り
内室それにか今宵はとある寺へ入しに思の外に實入多く頭領
始め夥伴の者はまだ彼處に在り我々も今一走り往て來んと口
々に呼はり手々に負ひたる荷を解釋て又とつかはと走り往ぬ
姫は吻と太息つくく見遣る目に入る一個の葛籠オ、是こそ
は先に妾が此孤屋へ盗まれて來た時に入られて來た葛籠ある

が借は今宵盗みし品を入んとて此葛籠を持往しか賣ては一時
ありと我身を入たる此葛籠へ戀しき人の畫像を打掛け心往く
ほど眺めしうへ畫像の面前にて死んものと葛籠のほとりへ燈
蓋を近づけ小袖を脱て葛籠の上へ打被らすれば極彩色に満き
し畫像見れば見る程能く出來て其人を眼前に見る心地し是で
魂魄さへあるあらば此口が物をいふあらばと女心の又も由あ
き迷に暗みア、此畫像に魂魄を入れて見たや魂魄入し彼君に逢
たや如何あれば目鼻顔容其人に其儘あるに此口が物をいはぬ
此目が妾を見ぬアラ戀しの辰丸様辰丸様へあう。と我を忘れて
狂氣の如く畫像へ我身を摺附々々口説泣此時不思議や何處と
もあく、姫上。アあの聲は。姫上。アラ不思議但しは妾の心の迷か。辰
丸は是に在り。ア畫像が物言ふた正しく畫像が物言ふた借は

妾の誠が通じて嬉しや嬉しや。

(二十)

嬉しきにはしたあきをも打忘れて家の中を躍り廻れば、やよや
姫上静まり給へ。辰丸は葛籠の中に在り疾く此の綱を切解き
へ葛籠の蓋を開き給へと二度三度呼ばれて姫はやうく心附
き、ナニ此の葛籠を開けとや借ては誠の辰丸様が此中にましま
すか。と不審さより懐かしさが總身にはびこりて足でや歩む手
でや這ふ無二無三に走り寄り先に自害せんとして選び取りたる
刀をとりて葛籠に掛けたる綱をフツと切れれば中より蓋を剝除
けて辰丸は一刀掻込み現はれ出家内を屹と見廻して、姫上四邊
に盗人は居りませぬか。といへども姫は唯恍惚と辰丸の姿を眺
め詰て應あし、姫上御精神は健あるかモ、姫上。と脊を拍れてオ

誠の長丸様ぢや長丸様ぢやか懐かしう御座ります。としがみ
附てワツと泣く口は手を當て、若聞く者やある心許なし長丸斯
くまぬりし上は御心弱くお歎き給ひそ。とて尙四邊に心を配り
つゝ、聲を潜め姫上此處へましませし仔細は大略は推し知ぬ我
が今宵まぬりしこと不審う思すべし先我上より語り申べし今
宵我寺へ盗人來りぬ寺あがら僧衆にも血氣あるが多く寺男の
強健あるも少あからねば防がんと造りたれど住持ある人これ
をといめ慈悲忍辱を旨とすべき僧侶が盗人と争ひて手紙ある
ぞ負たるは見苦きものあり俗家の間んことも恥かしければ佛
像寶物へだに手を掛すば唯奪に任せよ彼等何程の事をか爲ん
とて盗人の爲すに任せられしが我は尙手を空しうして居らん
こそこの口惜さに盗人の後へ廻りて其運び出せし物を見るに中

に見覺えのある葛籠あり猪は師の庵へ來て姫上を盗み往しと
同じ盗人あり其棲所を探りあは必ず姫上の消息は知れん好手
掛を得たりと思ひ盗人が葛籠の中へ詰たる物を取出して目に
かゝらぬ處へ棄我其跡に身を潛めて此の處まで負れ來しに案
に違はず姫上に遇まぬらせしこと偏に佛神の冥助とやいはん
定めて悲しき事の歎々を極め盡し給ひしまらんされそを問
まぬらせん暇あし盗人らの歸來ぬ間に御伴して此の處を逃れ
出べし御用意いへ。と急がせば、猪は妾を連れて退て賜はるか。され
ばあり姫上と我と唯二人間路を走らんは後護き業あれど今は
しも事急にして嫌を避ん暇あし急ぎて退いはん積松を點さん
には道の便宜れど盗人らに覺らるゝ虞あり唯間をたざりいべ
し御衣の裾を引上給へ御手をとりいはんと立寄ば姫は喜びの

色面に満ていそくと裾引上げ辰丸に手を引れて出んとする
 表の方に何時の間にか洲濱歸り來り大手を廣げ立障がり姿に
 似ぬ大膽の小猴子人の妻を盗みて何處へ行くやと呼はるに辰
 丸は儲こそ盗人の張本と物をもいはす小太刀を抜て斬掛れば
 洲濱も大太刀引抜て丁々撥矢と斬結ぶ一人は良人一人は戀人
 何れに怪我をあらせても悲しみは我身一つと娘は悲しき氣遣
 はしさに喃其人こそ妾の良人よ此御稚兒は妾が一門の若殿よ
 俱に暫く及を取めて妾がいふ言を聞給へ喃危あやと彼方に立
 添ひ此方へ廻り見目ハア初音娘其意の初音あらで啼音血
 を吐く牡鹿聲を限に呼を叫けと聞ばこそ尙も烈しく切結ぶ娘
 は吃と心を定め稻妻の如く輝き渡る二筋の及の下へ我と我身
 を投入れば雙方あまやと及を引く間もあらばこそ辰丸が及は

娘の肩先洲濱が太刀は娘の乳の下をバラリスンと斬裂いたり、
 ヤア吾妻に怪我させた。娘上手をば負給ひし。と雙方齊しく及を
 投棄薬はあきや水持來給へ。イヤ水は禁物あり白布はあら
 すや。と今迄鎗を削り合たる驛同志娘の手疵に和らきて諸共に
 介放すれば娘は苦しき息をつき辰丸様吾良人も強さ給ふあ妾
 は死る覺悟にて及の下へ入しぞや。トハ又如何。何故と。左右より
 膝を寄れば、さればあり何を先に語らんか先辰丸様へヤべし是
 あるは妾が良人洲濱殿。と聞て辰丸大に驚き情は聞つる洲濱殿
 か初より此家の主人を娘上の婿君と知らばあさ娘上を伴ふ
 て往んとすべき又娘上に此怪我はあらせぬものを去にても洲
 濱殿が此家に在すは不審。と眉根を寄れば娘は又洲濱に向ひ、吾
 良人へヤます此御稚兒は妾が親里金川家の一門辰丸殿とて吾

良人に賜へんは憚りある事あらまが幼きより戀まぬらせし
 殿御父母も許し給ひて行末は此君の妻とのみ思居たるに引換
 て御身より婚儀の懇望是こそ兩家の爲ありとて父の仰の黙止
 難く心に染ぬ縁定め御身の許へ嫁しかば此君の事忘るゝ間も
 あらざりしに思掛あき凶變が身の幸か但し又修羅へ誘ふ惡魔
 の使か御身に連れられ此美作路を彷彿とて野伏に攫はれ谷底へ
 身を投しを呼活給ひしは日頃より慕に慕ふ辰丸様か顔を見れ
 ば尙彌増に煩惱の雲胸に填て道も操も打忘れ如何で思を露さ
 んと思にも似ず又盗人に攫はれて此孤屋へ伴はれ再び元木へ
 歸咲御身の花と見るハ事は佛神の控綱良人ある身に有間敷淫
 蕩心を思絶よと諭し給ふと知あがらも思切れぬ凡夫の悲しさ
 事そ死たら此煩惱の雲も晴れ二ツには良人への言評にもあり

あんと今宵自害と思ふ折柄思も掛す戀人が此葛籠より出給ひ
 偏に妾を救はんとて連れて退んと曰ふに又簾々と上氣して死ん
 と思ひし事も忘れ手を引るゝが嬉しいと喜びしは瞬く間に
 忽ち良人の目に掛りしは争ひ難き天の罰是ぞ生命の樂ごころ
 淫蕩者の身の果は斯あるべきと思悟りて戀人と良人の及に掛
 りしぞや喃吾夫是にて怒を霽して賜はれ日頃の罪を赦して賜
 はれ喃長丸様枕こそは替さね生命を掛けて戀渡し妾を不慙と思
 ば召亡後に一遍の御回向を頼みまする夫で日頃の思も晴れ成
 佛を致すぞや取分て吾夫に言置度は妾が上を見給ひても世に
 因果は遁れぬものを此後は惡き生業を思止りて賜れと五臟を
 絞る悲歎の涙涙と共に疵口より血颯然と進り次第々々に弱往
 く二人も互ひに目を合せ歎息の外あかりけり折しも表に聲あ

りて姫君暫し死を待給へ息の中に聞せまぬらすべき事ありと
 呼はりて入来るは旅装ひせし一人の男辰丸は目早く認め、ヤア
 木六太汝は先に我を此美作へ送果て中島の城へ立歸り元の如
 く父上の許に在しが何用ありて今頃此處らへ來りしぞ。と問に
 彼男、さんい中島の城も和田の落城と同夜に落されてい。といふ
 トハ、如何と洲濱も辰丸も詞逼しく問掛れば、さればい中島
 の忠臣島根殿和田へ内通せしと告越れし姫君の御使島根殿の
 手に捕へられ必定是は洲濱の詐謀にて誰間の策と知れたり敵
 の計につきて計を施すべしとて姫君へは島根殿討れしとの御
 返をさし其夜島根殿撰勢をめて和田城へ夜討ありしに計圖に
 中て和田は忽ち落たるも岡山の浮田が如何して此事を知けん
 兩城の混雜に乗じ大兵にて兩城へ一時に押寄せ攻落しぬされ

殿高允公御夫婦始め主君伊織様も御無事にて再挙を計んと
 近き邊に忍て在し島根殿も御踪跡知すと聞しが和田に在し
 竹中殿婿竹殿不思議に遁て御主君の隠家へ來ての物語に島根
 殿は一人敵方へ紛入り浮田を刺殺して冤を消めんと姿を扮し
 て立出給ひしとすい已も昨日迄お主の隠家に在しが若君へ此
 事を知せ参らせよとの事にて只今此處へ來掛りしに何事やら
 ん家内の騒動聴ともあしに立聽ば思も掛ぬ姫君の御臨終御二
 方も在すに漫に詞を掛申ぬ。と語る節々聽畢りて洲濱落たる太
 刀を取て警弗と切拂ひ嗚呼我過てり金川洲濱兩家の滅亡姫の
 枉死皆我心の僻めるに起れり今より心を翻して正道に立歸ら
 ん印に誓を切棄たり是よりは身を佛門に歸して姫の善徳を用
 ひ責ては今迄の身の罪を償ふべし。と潔き詞に手を拱きて歎息

七變化 完

彌生露伴子著

明治三十三年三月二十三日
三月二十三日
三月二十三日

の外あかりし辰丸も我とても何時迄火坑に在ん家門の衰滅主
 君を始め父の零落口惜き限あれど生命愛度ましませばあど再
 舉のあらざるべき殊更島根主浮田を仇とし狙ふといへば一旦
 佛門に身を捨し辰丸が再び修羅の巷に入べき要ありイザさら
 ば洲濱殿世に在し日の仇も冤も是迄あり諸共に大慈寺ある我
 師の坊の化度を請て菩提の道に入べきよ菩提々々と言聲の耳
 に入てや姫は細き目を開き嬉しげに笑ひしが其儘息は絶にけ
 る南無阿彌陀佛の聲に交はる夜明の鴉可哀や姫は死出
 の旅東雲の空の門出も道案内あき一人旋草茫々たる野路山路
 たぞり惱みて迷ふあるべし
 姫が屍骸は大慈寺に葬られ辰丸洲濱は其日を以て剃髪したり
 洲濱に從し野伏らも皆正道に歸して大慈寺の寺男にありけり

337067

の外あかりし辰丸も、我々も何時迄も火坑に在ん家門の衰滅主
 君を始め父の零落口惜き限あるれど生命愛度ましませばあざ再
 舉のあらざるべき殊更島根主浮田を仇とし狙ふといへば一旦
 佛門に身を捨て辰丸が再び修羅の巷に入らば諸共大慈寺ある我
 ば洲濱殿世に在し日の仇も冤も是迄あり諸共大慈寺ある我
 師の坊の化度を請て菩提の道に入らば諸共大慈寺ある我
 に入てや姫は細き目を開き嬉しげに笑ひしが其儘息絶にけ
 る南無阿彌陀佛彌陀佛の聲に交はる夜明の鴉可哀や姫は死出
 の旅東雲の空の門出も道案内あき一人旋草茫茫たる野路山路
 たぞり惱みて迷ふあるべし
 姫が屍骸は大慈寺に葬られ辰丸洲濱は其日を以て剃髪したり
 洲濱に從し野伏らも皆正道に歸して大慈寺の寺男にありけり

337067

蝸牛露伴子著

七變化 完

明治二十三年
十二月中の作

七變化

露伴

第一聞けば道理のこそく大盡

黒のお羽織に同じ着物、それに配合つて御容体もいやしからず、
 色白く鼻隆く、髯こそ無けれ誰が眼にも身分ある人とは察せら
 るゝ起居動作よろづ寛活にて細かい智慧をはたらかせ玉はぬ
 るころが確實に乳母日傘で育てられた証據を勿体ないことあ
 がら老妓の才次が評價せしは違ふまじき御客さま、何でも那方
 かの田舎の大々盡御本宅より十里四方ばかりは何方へ行かれ
 ても百姓さにも黙禮さるゝほどの豪農とか長者とかいふもの

七變化

に極まつたり、今宵はまだ御見えあさらぬか、娘よ大切に思ふて一切御意に入らぬ事の無いやうにせよ、あの様を金髪は當世かりはるにやに行つて搜したとて容易に攫めるものではない、逃してはあらぬぞ他家へ外らしては此家の耻ぢやぞ、派手くしきを好み玉はねば少し御機嫌の取りやうはむづかしけれを随分骨折つて遊興に實の入りやう仕向けよ、さりどて御同伴の龜井さまを決して、鹿未にするを、御同伴を見へてもたしかに彼の人は御氣に入りの三太夫、それをか忍びの御遊興に友輩仕立はある習ひ、會計万端取りさばくところを見て取つて従者と誰しも心付くところぢやが扱其の従者をあさつてはあらぬ、従者を好くせねば旦那は繋げぬぞ、然し従者をまた旦那通りにしてはまづい、客商賣のつらいところ氣兼するところは此處

の斟酌、愛想の撒きぶり天窓の下げ振り了解つては居るだらうが油断するを油断するを、指揮役は貴様、鶴の毛で突いた程も間拔る事の無い様にと婢どもに心得させよ、お新は蜘蛛敷肌には適いが穏和として甘味が無い、お縫は柔和だが小機轉が利ぬ、二人をつきませて等分にしておいふ質の女あらあの大盡には打つてつけどが、言はぬとか此間迄居たか仙を癖が悪いとて放したので今は困る、あゝそれ、御意に入ららしい藝妓は誰々才次、三吉、小弓、花助、小蝶か、小さいので富子、芳子、あぐり、かぐり、魚まぢりの連中まで、其中でおぼしめしの有るがありはせぬか、眼瞞を利かせて能く氣を注ろと一々云ふまではあいが是も歳の暮前に飛び込んでござられた福の神さまをどうか長く此家の坐蒲團に載せたいからの餘計を心配、大分巳も酔くあつたと笑つて云ふ

は、雨を玉にして枝にとむる柳橋あたりは評判よき扇屋の老主人。それに比較ては若い女房も笑ひあがらう。退付庄司さまもかいでにありませうに下手な作者の書きぞこあい御講釋は切り上げて下され、ホ、云はずとも良いことを、然しあのちよいと工夫ものがありませんよ。それは何といつてあの御客様は此頃のお馴染みながら最四五度も御來臨にあつて常例分にすぎた結構をお行渡り、多分お黄白を撒て行かれる割には座敷も左程賑やかにし玉ふにてもなく、何を是といふ好みのおあそびもなく、唯にこくと打笑つて、龜井さまの罪のあい滑稽話を面白がり玉ふばかりあること怪し、何か別にかもわくのありて、世馴れたまはぬ故にそれを打出し玉はぬとは明らかに見えた道理、龜井様もさばけては居らるゝやうなものゝ、底まで汲み取るほど

四

の通でもまし、妾は見取つたところあれど、さあ是が困つた事には。何が困つた。實はあのやうなばつとした方が數々來らるゝ、眞底は知れた事。誰に。それが困つた事といふたら、もう解つて居ませうがあの小蝶。小蝶では駄目あり。然しそれを駄目にしては面白い収入のあいは知れたと、林檎の婿しがることを増長させねば素より興さめて、酒盞の中に水を入れて飲みかはずやうな話らぬ話しにあり、自然と足も遠くある譯、折角の太々盡を逃して仕舞ては口惜けれど小蝶では實に仕方なし、あれほどの堅意地の慾無つ子もまた無い世にあれ程の大盡もまた少し、どうか甘い法をと、夫婦の話しの種子にありし大盡は今世に何者ぞ。かゝるところへ車の音がらくそれ御來臨ぢやぞ。

間の障りの襖取り拂ひて幾室かを一室にさし見渡す青臺の海
ひろき末に舞臺をしつらひ勘右衛門金太郎等が踊り蝶より輕
く鐵五郎が腕和楓が喉いづれも拙はあく又兵衛毒蝮が笛つ
み撃て吹て彼等聲張りあげて歌へば其等牙擦に力を
入れて弾き眼も耳も榮華にいそがしくて驚くほどの催し是で
御客様は例の唯二人限り其他は白襟赤襟扇屋の有造無造少し
は他人も交りて居るべし。極樂の雛形を爰に湧せしは龜井様
の御庇蔭吾家の面目と亭主夫婦喜ぶ中にも庄司様とか林様と
かまだ眞の御名さへ明らかには知れぬ本大盡の素性をわざと隠
し玉ふを尙更知りたく又一つには愈々小蝶は御心あるに極ま
らば如何にもしてとの配慮に油斷なく酔に乗じて演藝の面白
きところにやんやくと掛聲する龜井の一言一句にも耳を澄

して若し此大盡の本來知らるゝこともやと心を注るは苦勞あ
るべし。やがて一齣終つて藝妓どものさゝめきたつも賑やか
に獻すの押への御重ねのに末は亂れて蠟燭の姿も無態にある
頃明日は用あり龜井歸らうと大盡急に歸り玉へば亭主けいん
顔して驚きけるが扱は眞實に派手あことを好み玉はぬかそれ
とも御身分高くして御遊興の世に知られむことを厭ひ玉ふか
と推察しかねて其夜女房に問へば女房誇りがに解りました解
りました林様とは假りに龜井様が彼方を護つて作られし名ま
ことは庄司様とぞそれ解りましたか或國の長者議員今宵龜井
様に鎌をかけて妾がとうと釣り出しました其處に議員人名
録が有りませうに一寸とらんあされ。成程々々それでは解つ
た矢張り林様にして呼ぶがよいぞ悪名を新聞屋めらに立ら

る、を五月蠅がつての御變名は道理あること、表徳をつけて昔時
の人たちが遊んだも是ぢや、して又龜井様は何ぢや。あれは詰
りは庄司様の御家來同然、たい同伴に遊ぶを遊ば徳にして連れ
立たる、ばかり、時に御聞あされ、今日のやうな事は龜井様には
面白けれど、庄司様には少しも面白からぬ筈、まことは最初不圖
此家へ御いであされた折、御酒の相手に小蝶才あを呼ばれて
それから小蝶に御眼が止まられたが、さてそこは好く育てられ
た御方だけに、當世の歴上紳士とは違ひ、龜井周旋てとも妾に働
らけとも打出しては仰りかね、もぢくとして唯遊ばるゝとこ
ろが何と有難いではござりませぬか、ホ、生息子肌の長者議員
一つは聞えを彈かり、一つは勝手の知れぬところで毎夜の無益
金費ひ、他の妓あら随分はたらいて押付た揚句、御容美頂戴あど

八

いふ風に出たき場あれど、彼妓では到底始まらず、又龜井様もそ
れを知ては居るらしけれど、相手は今小町とは餘所でも聞
糺して覚えて居るゝかして、とんと察せぬ振が可笑し、今日も
今日とて立派な金の指輪を庄司様が小蝶に與られし時の其無
骨さ、艶ある言葉ひとつ添へず、唯これを買様に與らうとは如
何に白無垢育ちでもあんまりあ無粹、又それを貸つた小蝶が顔
こそ美しけれ、あり難うございますと云つたきりあは是も色氣
の無さすぎた口のき、やう、無粹と惡堅い變物との鉢合せ、万劫
立つても洒落たことの成らう見込はあし、然しあれを其まゝに
しては何程庄司様あればとて倦が來て詰らあくるべし、今日
のやうな騒々しいことは素より御嫌ひ、はてどうかしてと、い
づれ人の貨を引出す工夫、見込まれて甘さるゝ男の行末のあぶ

あし、小蝶が偏屈で有名の妓あればこそ長けれ、金見て倒るゝも
のあらば、悪事一つ成立て小新聞の雑報の種にあるべし、幸に小
蝶といふは姿形うるはしく技藝秀たるばかりかは心術もや、
正しく、未だ痴蜂の眠るを許さざるの花とて評判高きものあれ
ば扇屋の嬢も、庄司がおもはく云ひ出して、其様を猥りがはしい
事を商賈には致しませぬと強く反撥られむを悪くおもひ、さら
に嘴も容れざるぞかもしろき。それにして、長者談員悟られ
たとは知らず、平常の田舎大盡に化丁せた氣にて次の日もまた
來りけるが珍らしや一人で。

第二、野暮が裏がへりて粹の交際

朝夕雑巾かけらるゝ柱椽側も黒うはありやすく、素地の色の夜
めにはもどり難し、ましてや人の心は酒に染められ戀に垢つけ

ば、顔の様子にあざけあいところ無くあるに從つて何時の間
か悪習のつくが常あり。こそく大盡或夜たゝひとり來られし
節、小蝶ばかりをどのか指圖に扇屋の女房心得て、わざと狭くる
しき茶がりの四疊半に、解けぬ同志の二人を打込み、一寸の間
だけ愛想をこぼして機嫌取りどり大盡の耳紅くあるを見すま
し、其座をはずし際にふりかへり見て、其處にそうあらんで居ら
るゝさまはさうしても殿様奥様、よくお似合ひあそばしました
オホ、と笑ひ聲を残して立去り、後の様子に心を配れば、鈍おこ
と哉、矢張例の如く男は庄屋様が村の者の振舞の序に呼ばれし
やうに堅くすわり、女は姑の前の嫁のやうにちまゝとかしこ
まり、談話も折ふしは途切れて宵の鼠が人を憚りあがら物食
う音の如くぼつりぼつりとして一向時あかず、是ではと又出て

行つて、これさせぬため丁度三人あれば未だ知られぬ大盡に花
合せの大概を、斯る手が光一かゝる手が赤、是れが鳥、是が三本
青の短冊揃へたが何に、梅松櫻を揃へたが何と教へがてらに四
五番爲すれば、漸く覺えて漸く面白味加はり、よきほかに夜をふ
かして太盡は歸られしが、それよりは來らるゝ度、に花合せ、花合
せ、段々其道に通とあり玉ひて、昨日の御下手ありし方が今日の
御高言は憎らし是非に今宵は御負し申してと女房が言やうに
あれは、庄司ますく面白く、一つには小蝶と遊ぶに好き、錢を得た
る心地してか、龜井を連れて來ても前の如くは無益に騒がせず、
其癖賭物あければ張り合あき勝負事故つまりは鄙しき黄白に
碁石をあてゝ互ひに競へど素よりあぐさみ三昧、勝ても女共か
らは取れず、負れば與らずには置かれねば小さき争ひあがら何

しても女共には徳つく事あり。誰やらが言葉に賤しき戀は時
ありて功名心を奮起せしむることあれば、賭博は常に功名心を
も毒殺すといへるほど恐ろしきものゝ面白さは又格別か、庄司
これに凝り出して更に慾氣はあければ小蝶才次と相手、夜
半の鐘耳に入れずして菊ぢや桐ぢやと圖に乗ること毎々あり
しが、或日龜井と二人づれに來て例の通りにと女房に含めて
飲みにかゝりしに、他のものは揃つて小蝶は見えず、お氣に入り
の彼奴はどうした、是非に貰つて早くよこせと龜井少しぢれて
云へば女房頭髪を氣にしあがら、先刻から度々人椅子をかかま
したがどうもちと、まア少時お待ちあされて、お直に見えませ
うと其座の才次に眼くばせして云ふを引取り、今宵も大方林檎
の來て下さるべし、島田を何かに結び變て彼方の昨夜の眼を驚

かさうあぞと今朝妻が逢ふたとき云ふて居られた位あれば、追付廓架にやさしい足音の聞へませうと紛らす折しも、生憎とこやらの座敷で、小蝶は弱虫御下手な事だぞアハ、と笑ふ男の聲、酒に充分肝癪玉の彫れ居し龜井は何堪ゆべき、嫌め御らけ、此家に來て居るではあいか、客が連込んで來たか知らぬが、實あるまいに林公に甘からぬ酒を飲ますとは扱々貴様もして、まア一寸堪忍して下され、先刻から度々頼みました、向ふの客が買下のやうな粹様あら好ければ、惜いほきの野暮天あれば、今少時お待ちなすつて。待ぬ、粹様をかしは他所の人に云ふて呉れ、あてつこすつて我を野暮とか、我は野暮だ、兼野暮だ、野暮だから待たぬ。イエ、そういふのではございませぬが。

エ、五月蠅こと面倒を、貴様は成すば我が直に酔に燃立つ一時心止る間も、あく飛び出て多分此邊とがらり襖を明くる迄、中より何者か一喝きびしく、詰らぬ騒ぎにあらんとする所へ、女房來りて双方へ平謝罪にあやまれれば、思ひの外にさらりと濟み、互びに一杯取り替して笑つて仕舞ませうと龜井の言葉に男同意し、其は却つて面白い譯か、ゝることから知り合にゑるも何かの因縁、小蝶は其方のお座敷にあげませうと一切さばけて、庄司が座敷に來り、初對面の挨拶も角張らず、日米銀行員松本新吉と名乗りて、まづ一つ獻上御返盃、か樂に居らつしやれ、御免かうむりますと膝くづれて是より先は話し熟し、遂に花合せまでにあつて松本したゝか負けぬ。

第三、戀にはあらで陥るはく

又の日を約束して庄司は松本に別れしが、其次の夜もまた落合
ふて花三昧、昨夜負けましたは弘法の筆のあやまり猿も樹から
落ちることのあると同然、今宵はかゝらず勝てく、眞下をあやま
らせいでとは新吉意氣込つよく戦へば、十二回の末に庄司大分
やられて残念な口惜がり、是は唯ほんの御愛嬌にわざと譲つ
てあげたばかり、其證據には今度は手並をあらはし御氣の毒を
がら痛い目をさせ申すべし、判任では勝負いづれにしても小
く乗氣にあるほどの事あければ我は初めてあがら奏任にして
は如何、是は面白し然しまた負すがちと罪あやうあと、ぢらしの
毒口をきいて勝負にかゝれば、案の外松本だんく負けて見事に
に革囊の底をはたき、え、無念千万今夜も仕てやられました、閉
口閉口、然し此儘では引退りませぬ、まだお馴染も深からねば十

エッキ使ふことも出来ず、仕方なしにこれで御別れ申します、が明
晩は充分仕度してまゐつて、えらい目にか合せ申しませう、一
奏任では手ぬるければ、十二負てあげてもよろしいといふ寛み
があつてありませぬ、明日は勅任で大に戦ひたうござるが、ハ、
負腹か負惜みか知らぬが大分熱くおありあされた、勅任でもあ
んでも此方は關ひませぬが然しまた負してあげるがちと罪あ
やうあと、返り撃にすれば松本はますく口惜がり、おぼえて居ら
つしやれと言葉を残し、大分夜も更ましたれば小蝶さん左様あ
らと庄司へも一禮を返し、歸りがりしが少時して立歸り來り、や
庄司様も最お歸りにあります、か、まア良ではござりませぬか、今
此家の出口ではからず極々懇意の朋友に逢ひまして二人連れ
だち立戻つてまゐりましたも、是非とも復讐いたしたいからの

ことさアお許しあら小蝶さんに脱てもらつて僕の朋友を中に
入れ、今一戦ねがひたいもの、それは面白さア此方へ其方を御
遠慮は要らず連ておいでさされと云へば、年は四十ほどの元頭
の紳士入り來り、早川甚作と申します、以後御見知り置れて下さ
れ土工擔當所會計をして居りますもので、初對面の挨拶して、
奏任で直ちに初め、一番すんで矢張り庄司の勝あり、是はいけぬ
今夜はよくくの非運と松本嘆息すれば庄司得々として如何
でござると誇るも危うし、浮雲の富籤より當にあらぬ賭博から
結ぶ交際、明日を契りて別れし後、小蝶ひそかに眉を皺め、林檎林
様もう賭博はかよしあされ、厚い御鼠負にあつかりますれば巾
しますが、能くは存ぜねど、彼早川とかいふてまぬつた男はたし
かに年中人の血を呪つて辱す名高い悪黨、海老長といふ者が化

かぶつたに違ひありません、向ふでは妾を知らねば能い
おつて賈下を引掛るつもりで、あの松本といふも多分一つ
狐、夫と睨じ合せ酔い眼に賈下を逢はせる手筈に極まつて
ります、餘計なことを差出口に申すやうなもの、賈下は林様
は、假りの御名、まことは庄司様とて立派な御身分ある御方と
は、いゝお隠しあさつても知つて居りますれば御知らせ申しま
す、ほんどに恐しい世の中、妾たちも此様な商賣をして居ります
故御客の御相手には花も引きます、トランプもしますが、もうく
賭博は大の嫌ひ、幾人も御客様の悪徒に釣られて悲しい目に御
逢ひあさつたことを見て、つくく悪徒が憎く、てありませぬ
ば、彼等の工にか掛りあされぬやう、ホ、老婆じみた親切者で
ざりませうといへば、庄司は喜びて莞爾しあがら、これだもの可

愛うてあらぬと領に手をかけ引寄するを、あれ御戯談をすつて
 はいけませぬと身を縮めたる振ひとしはあつかしく、よし／＼
 貴様の言葉あだにはきかじ、然し明日だけは約束したれば是非
 あし此間から勝たなければ、我が運命よかつたら、其だけは貴様に與ら
 勝つとは極まらねば、我が運命よかつたら、其だけは貴様に與ら
 うと、敵手を悪徒と聞きあがら、尙勝つ氣の迷ひ深し

第四、當世珍らしい女の心だて母し

れぞとは打ち出して云ひ玉はねぞ、我身に思ひをかけられし
 眼付素振にもあり、と見え、又あの才次姐に、小蝶さんか、
 され、其指輪も大方あの林檎から貰ふたのであらうと、
 ところから推しても他所眼にさへ左様見ゆるに違ひなし、
 べてに和しく、上品にて下卑ず、男振も年齢も御身分も何

一つ厭とかぶりを横にすべきところはあし、されども何となく
 腑に落ぬやうな點あつて、少しも可愛からぬ人、御恩にありあが
 ら批を打つではあきれを妾が身を任せて千代かけ後世かけ契
 るべき方にはあらず、妾は鄙しき商賈に馴れて、媚を賣り愛敬を
 鬻ぎ酒宴の席に色は添ゆれど、心までは鄙しくせじ、成るべくば
 三筋の糸に多くの人をあやまし、浮名數々立て後よるべ定めぬ
 三十新造彼女を見よ、三味線とりし者の身の末よ、いばちあたり
 やと笑はれぬやう爲したければ、駒が好い雁が好いと、他の妓達
 は浮つく中に變り物よ、田舎娘よと云はるゝも、關はず品行を
 みて怪あ家へはあまり呼ばれず、まして我身の榮耀に、蕪人さん
 を愛すべき、投の情を玩弄ばんとする客の、屢々無きにはあら
 ざれど、妾に賣るべき情は持たず、唯一時の濡事に百年の身を誰

か汚さむ薄命にして堅氣の家の兒とは云へねど願ふは頼母し
 き人を見立て縁あらば琴爪かけし指は薪澁染ますとも厭あら
 ず、何も土藏の敷多く持ち絹布の夜具にくるまるばかりが幸福
 では無しと日頃から思へど、扱男振の好い人はあつても心操の
 良い人は少いもの、心操の良い人はあつても賤しき妾等に眼を
 属る人に心操の良い人はあいもの、あの林檎は何處から何處ま
 で悪いと申すべきところなく、然も妾身に御心を寄せられしはあ
 りがたけれど、聞けば議員とやら長者とやら、とても及びぬ配合、
 よしや妾身をいとしう思ふて下さるにせよ、唯此儘暫時の玩具
 にさるゝばかりあるべきか、思へばそれが憎し、憎いといへばあ
 の博奕ども、今宵は企みに企みて大仕掛に持掛け、必らず一時に
 庄司様を陥坑に入れ、何も知られぬ御方を香ばしい喰物として

後でべろりと舌を出すあらむが、昨夜あらましを御報申しては
 置たれど大腹中の庄司様のことあれば、ナニ何程の事をするも
 のか一度でも二度でも顔を合せ言葉を交せしが不運、良い加減
 に負けてやらうと覺された御様子、然し勝負事勝て國に乗るよ
 り負て尙氣のはづむもの、若し深入りされれば必定酷いめに逢
 され玉ふべし、悪徒どもはまだ様々に綾を取つて御身分あるに
 附込み御氣象の大きいところに附込み、色々にして巻奪りにか
 ゝるべし、嗚呼お氣の毒あか可憫あ、どうかして餘り毒手にかか
 りあさらぬやうして上たいもの、分に過た頂きものやあんぞ
 に惚れて厭ふことにも小蝶の首の骨をまげて唯とは云はぬ代
 り、今宵は何があして陰にせよ陽にせよ庄司様を助けて進たし
 と、我家の中にて夕化粧しあがら小蝶の思はく、天晴確實した了

簡あり。或老人の語られしが昔時は江戸藝者の意氣込今とは違ひて飽までも女を磨き、かりにも淺麻しき所行を耻づると深く、強さに屈せず弱きを凌がさる俠客肌のことを見、辱弱さも左が刀を恐れず痴漢の財にはあづまざるやうあるを世も愛し己も誇る風ありしが、御維新以後東京は枕の物任するより外の悪みは知らぬ四國西國の舞武者さまがたの跋扈る舞臺とありて、何より彼よりそれが一番とさだまり、京都の舞子藝子と同じものに變り果て、鄙しきものに客から仕込れ、前方よりは十段も二十段も價值下りたるよし、かゝる中には買めてよき小蝶が心掛神も可愛がらせ玉ふか流行に流行て今宵も扇屋より既迎へに來りしが勿論客は庄司あり、何してやらむ悪黨を君が爲に。

第五、狡猾の手の奥は足の裏にあり。

庄司、早川、松本の三人巴にあつて戦ひはじむる傍に小蝶ひとり唯見物しあがら心の中は毫も悠々あらず、庄司がために悪しき巧計を悪徒どもが爲すあらば其を観破して何卒蒼鷺に見込まれし鶴を助けたき願ひ、さりとして眼角を鋭くして汚き手を檢出さんとして居ることを悪徒等に氣取られては妙あらねば心勞は二方三方、四方に走る意馬を引締め油斷なく打守るとは恐ろしき奴等も知らぬが佛、良い氣にあつて今日こそは鼻の油を手ひひき、引く花牌の表面は金銀紫紅の色ぞり美麗けれど裏は畢竟眞黒々、慾に昏みて人道の明るきところを踏外したる儕輩の争ひ、扱も鄙劣事ありけり。そもく賭博のはじまりはと講釋するまでもあけれどいづれ此様あさもしき業の起りは

素よりさもしい心が種あれば不義、無情、残忍、我慢、詐偽、争浄、洗計
 まで、何一つ悪るいこととの伴はざるはあく、殺子には鉛を入れ、盆
 庭には手品つかひよきやう凸凹を作ることあり、穴を豫め其座
 の下に作り置き乾兒を其處に忍ばせ上より相闘して針尖の
 働きに下より隨意にするあり、毛綱といふ六かしき企みもある
 よし、花合せにも恐ろしき手は敷ありて、七枚ひくべきを紛らし
 て八枚引くもあり、札を切交る時最後の者には松の短冊あり山
 の十點ありあぞと偷看置くもあり、尙も酷きは袖袂に他の札を
 持ち居りて臨機應變それを用ふるもあり、一度出て伏せられた
 る札を私に取り用るもあり、片膝たてあがら前に乗り出し舉動
 元氣よく戦ふもの怪しく、足袋羽織に隠せる足袋の扣釦はづし
 置き、一枚二枚邪魔の札をかくし手品巧妙に破綻を出さぬも

ありとやら、其等にも増して悪計の凄きは百圓束を上下の二圓
 ざりで作りて跡は西洋紙を前詰めにし同謀仲間授受に大び
 らあところを見せて白痴を釣るあり、いよ／＼圖に乗せては夫
 をつかまするもありと、かされば第一は二人以上共謀にあつて
 一人を責むる不正の計器、第二は其座ざりの物を用ひてする手
 品、其三は手品の種を預め準備し置く悪策、第四は金錢授受の上
 についで、の奸謀、嗚呼、悪い智慧は出るものか、左あくとも其道
 の黒人は他の出す牌二枚を見れば既残のものは何に何にと悟
 るよしあればさうして素人の及ぶべき勝負を時の運あぞと淺
 薄に思ひ居る質のものあぞの脆く巻き奪らるゝは知れ切つた
 事あり賭博は是に限らず一錢銅貨を空にあげて裏が出るか表
 が出るかを争ふやうある淡泊な業にも手練ありて別れしもの

素よりさもしい心が種あれば不義無情殘忍我慢詐偽争奪澆計
 あど、何一つ悪るいこととの伴はざるはあく、殺子には鉛を入れ、登
 廷には手品つかひよきやう凸凹を作ることもあり、穴を隈め其座
 の下に作り置きて乾兒を其處に忍ばせ上より相圖して針尖の
 働きに下より隨意にするあり、毛綱といふ六かしき企みもある
 よし、花合せにも恐ろしき手は數ありて、七枚ひくべきを紛らし
 て八枚引くもあり、札を切交る時最後の者には松の短冊あり山
 の十點ありあぞと偷看置くもあり、尙も酷きは袖袂に他の札を
 持ち居りて臨機應變それを用ふるもあり、一度出て伏せられた
 る札を私に取用るもあり、片膝たてあがら前に乗り出し舉動
 元氣よく戰ふもの怪しく、足袋羽織に隠せる足袋の扣釦はづし
 置き、一枚二枚邪魔の札をかくし手品巧妙に破綻を出さぬも

ありとやら、其等にも増して悪計の凄きは百圓束を上下の二圓
 ざりて作りて跡は西洋紙を飾詰めにし同謀仲間の授受に大以
 らあところを見せて白痴を釣るあり、いよ／＼圖に乗せては夫
 をつかまするもありと、かされば第一は二人以上共謀にあつて
 一人を責むる不正の計畧、第二は其座ざりの物を用ひてする手
 品、其三は手品の種を預め準備し置く惡策、第四は金錢授受の上
 についで、の奸謀、嗚呼、惡い智慧は出るものか、左あくとも其道
 の黒人は他の出す牌二枚を見れば既殘のものは何に何にと悟
 るよしあれば、どうして素人の及ぶべき勝負を時の運まぞと淺
 薄に思ひ居る質のものあぞの脆く卷き奪らるゝは知れ切つた
 事あり、賭博は是に眼らず一錢銅貨を空にあげて裏が出るか表
 が出るかを争ふやうある淡泊な業にも手練ありて馴れしもの

は勝といへば何か相應の理屈あるべし弓術御指南役勤められし老人も賭弓ひきには敵はず賭碁打ちは人を急するが手あり、皆それぞれにある悪計一通りでは悪徒の飯の食へるところが無い筈に極つて居る譯を考へたら了るべし、賭をせねば五段にあつても左程甘い酒は啞れぬ將棋さしが漸く初段ほどの腕前にて日本國中駕籠と馬とで蒲團に終始腰を安置あがら旅せし其譯を聞けば先づ或宿に入り込みて將棋好の男を尋ね、其男を踏臺にして彼此に遊びに行き、自分も技を隠して戦ふ内、慾の深きものを語らひ、眞實我は充分の技倆あるものあり、我汝に助言すべければ日頃汝の敵手ある金持の隠居あさを向ふに廻し、互ひに高慢天狗の舉句五兩十兩の賭をして争ふべし、其時われ助言して必ず勝すべければ勝た上は半分我に與せ賭にする金は

我出すべし負るとも汝の損にはあらずと説きつけ、同道して金持の隠居あぞの所にいたり。先日之耻辱を今日は雪ぎて會稽の恨みを晴らさんと罷りこしました。是は能く御來駕、然し又返り撃にありに來られたか、どうも今年は弱い方の負る年でまことにお氣の毒あぞといちり合ひ、二三番すんで急込強く齒切をするやうにあつてから今度負ましたら此首を進ると襟を丁どたく威張る時、首あぞは口ばかりで請らず五兩も掛て首の代に下さらば其方の白髪首いたいたよりは結構おれば随分負して上ぬではあけれど眞物の首は頂戴しても迷惑故此處は一番わざと負て置きませう、其代り勝つたとて天狗は云はせませぬと皮肉に云へば、其様あらば汝も五兩掛よ已も掛むそれで勝たら何とする。其時は眞に閉口然しまアかやめあさ

い大丈夫小生が勝ますと威張り合つた末終に掛とあれば同伴にあつて其座に見物し居る將基さしは是は面白事にあらずしたるぞと生嘘つかつて煙草ばくくかねて教へし通り無言で助言すれば隠居は計られて五兩とられて仕舞ふあり其助言の仕様をきくに將基盤八十一格の何隅を一の何隅を九の九と定め置き又左りの手の人さし指より小指までの四本の頭と根と指と合せて九點に一より九までを配賦置き假令ば敵より王手かけられ此王いづれへ逃んと迷ふ時に將基さしの膝を見れば將基さし煙草管の吸口をぞにて薬指の頭と指をさし示す故二の五へ行くがよしと悟つて其處へ逃げ又金銀飛車角桂香歩王の八をも同じ理屈にて配賦置きて敵ふれば否を動かさずして自在に助言の出来るよし、まことに驚くべき工み之

を思へば花合せを尙更の事どのやうな巧計が悪徒の仲には有るか知れず小蝶も眼の届かざる中に無残や庄司三四百圓は奪られたり

第六、どちらも善くはあし

勅任といふは掛高大きければ庄司またよく間に酷く奪られかゝるを見るより小蝶は氣の毒さに齒痒くて堪らず眼づかひに意を通はして良い程に切上て終ひ玉へとすゝむれささらは悟らぬ顔して男はますく圖に乗り追かけく負るにぞ傍に居る身の忌々しき事限りなくさりとてお廣あされと打出しては止め難ければ空しく肝のみ煎れて女の小さき胸の中やきもきと慍の火の燃ゆるばかり如何とも詮方なき間に奪られてく又奪られて愈々烈しく庄司は傷めらるゝに尙懲もせで唯負た

るを口惜がつて取り返す氣かはづみを打て争へば思ふ盡へ遣
 入つた魚章め好い食物ござんあれといふやうある顔付して松
 本早川二人は得々と戦ひ見事に勝負のついたる舉句は庄司が
 千圓以上の負けあり。小蝶は見るさへいぶせく嗚呼否も場の
 物にされて可笑しからぬ一座を眸子に映せしと思ふ内勘定す
 べて終つて今や現金をわたすといふとき庄司莞爾と微笑むで
 小蝶の顔見あがら今宵はさうも御兩名にさびしく遣られたり
 早川君松木君實に君等は巧いもの中々及ばぬ感服感服斯う感
 服とほめずには居られぬ程感服しました。假事でさへ是程感服
 いたすに況して眞氣にあつて爲られたら我等はどの位感服す
 るか知れませぬと云ふたまゝ澄して居れば松木席をすゝめ假
 事とは何事。イヤ今までの争ひが。ふざけ玉ふま今迄幾番の

勝負を皆冗談と云はるゝのか。素より最初から冗談ばかりあ
 んの其様に怖い顔せらるゝには當らず實に君等の巧いにはつ
 くく感服しましたと軽く言葉を放ちあがら小蝶の方に向ひ、
 定めし退屈であつたらう、まア然し未だ夜も更ねば是から汝の
 望むまに機嫌を取つて遊んで埋合せを爲やうと云へば小
 蝶も庄司が大痛手負ひあがらそれを冗談と打消して毫も關は
 ぬ蟲の良さに驚き呆れ穴の開くは男の顔を見れば早川は堪
 らず急込んで。何を云はるゝ林君、今までの勝負残らず假事酒
 落ありとか駒を残らず常の基石にせらるゝ積りか。駒とは何
 の事か知らず基石は通例基石あり是から我は小蝶を相手に席
 を換へて一盃飲むで歸る積り、御兩君をゆるりとさア小蝶此方
 へ來よと立ち立むとする裾を抑へ、松木眼をむぎ出して聲高く卑怯

あり林の庄司め自分の勝ちし時だけを眞實の事にして負た時は冗談とは何所を推せば出る音ぞと烈しく喰つて掛るに、林はどつかりと坐りて、何所を推さずとも其位の音は出るものあり我等は當然の事を云ふまで、少しも無理はあし君等は何を疑がる、か可笑うてあらぬ、ハと奇麗を白歯を出して笑ひ一向平気で居れば早川は庄司をざろりと睨み。ふざけるを、ふざけるを、君等に遊ばれる我にはあらず、きりく始末を付ればよし左をくば氣の毒あがら憎まれ口もきかねばあらぬが、あん庄司様いゑ林様まア御冗談は良い加減にあされませ、あんまり貴下の御洒落が巧く出来て生づうづうしく負遊する太い奴のやうに見ゆるのであれ御覽あされ小蝶さんが吃驚して保へて居ますは、さア御茶番はもう切にして頂きたうござります、さア

庄司様いや兎角間ちがつてありませぬ庄司様とは議員であつた貴下は何、何、オオ林様、さア林君、君のはぐらかしが巧すぎて松本あどは彼通り乗せられた位あれば既か廣るされ二千兩近いばかりの少しの東西は彼松本が涙を吹いた面の見料にしても良い譯、ハハハと此爺は金齒を光らせて笑ひながら松本の方を振り向き。君も周章者ではあいか、何と見て林君の冗談に乗せられたのか、茶番であく誰が太い眞似の出来るものか、さア庄司君さうではござらぬか、コレ松本蟲押への丸薬でも飲玉へ、ハ、庄司君は草薙の口開けるを厭つて逃て行かれるやうを大、白痴大馬鹿の弱武者であいは、さア庄司君と下から顔を覗き込みぬ

第七、悪徒を茶にする紳士

早川君は好い舌を持って居らるゝ、中々立派な代理人も及ばぬと
 冷笑つて庄司一向關懷ねば、松本早川左右ひとしく口を揃へ、扱は
 愈々ずう／＼しくも逃る氣かと詰寄する權幕の把て喰むとす
 る計りあるにぞ小蝶鷲を周章、何とかせんとは思へども亦庄司
 の膽太くして悪徒等を鼻の先に待遇ふ様子に此先如何あるべ
 きとわざ／＼するのみ、唯心配に心配して空しく無事に済む所胸
 の中には幾多の波の立騒ぎけむ顔の色さへ悪くあるに、さりど
 ては又男は氣づよいもの、返辭もせず庄司は煙草くゆらして
 唇の端に微笑を堪えながら小蝶と顔見合して、ア、今思ひ出し
 たが今夜そなたが嬉しがらるもの持て来てやる筈ありしについ
 忘れて來たり明日の晩はかあらず汝を喜ばせやうぞ今夜は顔
 色も悪し此座つらければ歸宅て休めと和しい挨拶、此處へ付け

入りて兎も角も悪徒等に引離れさせむと、貴下はまだ御歸宅に
 ありませぬか、あらばお送り申してからと云へば首肯て、それも
 良しそれもよし我も既要はあければと外套の釦紐また掛にか
 いるを、松本見るより矢のやうに聲を放ち。あらぬ／＼歸すこ
 とはあらぬ、歸るあら歸るで良けれど歸るやうにしてから、歸れ
 此儘では歸されぬ、どうかしてから歸れ。どうかするとは。白
 ばつくれるを、散々負た其揚句た、此儘で歸らうとは餘りに蟲
 が好さすぎる、悉皆爲るだけの事をして歸れ。負たら負たぎり
 のこと他には何もすべきことあし下らぬ暇を潰すは厭あり、あ
 り早川君そうではござらぬか。さればさ、下らぬ洒落を爲さる
 も厭あり、爲るだけの事にしてから清潔に此處をか立あされ決
 して我等も無理ごめは致さず、負たら負たぎりにはあらず、負た

ら負たやうに爲べきことだけ済してか歸りあされ。分らぬこ
とを君等は云はるゝ。分らぬことはあし、負たら負たやうにし
て行けといふ分のこと。是は面白し田舎者の我にはますく
分らず負たやうには何うするものか、どれ又一服吸ひあがら後
學のため御講釋でもうけたまはらうかと、飽迄嘲弄すれば、早川
座をすゝめて。庄司君、君も分らぬ事を繰り返すではござらぬ
か其様お評議をあさる御身分でもござりますまい、素直にあさ
らぬと宜くござりませぬぞ。アツハ、是は妙々素直に致せば
こそ此通りあれ少し捻れて見ませうか。好い加減に白痴を盡
せ、誰だと思ふ。つがもねへとお威張りあさるのかね。オヤ此
奴は悪く人を茶にして居る、氣の毒だが素いのにませられるや
うお盲様はせず、さアく爲るだけの事をして歸れく口頭で

濟む事ぢや無いはと叱るやうに噂れば、庄司大口開て又笑ひ。
ぞれ爲るだけの事をして歸らうか、ヤイ汝達能く聞け、勝たら勝
たいけのこををして別れる、二千近くばかりの少しの者は我の
面を拜んたばかりの御賽銭にしても好い筈だ、さアく奉納し
ろく、二人の革囊あらひざらひ此處へ出して何方へあを行け
アハ、吃驚すめへぞ、悪徒ぢや我れの方が上流だよ、お氣の毒で
も何でもあいが鼠色あのにませられるやうあ地ではあ、知ら
ずば云て聞かせて呉れうかと何れも氣取ることはいが林の庄
司の長者議員のといふ鍍金に釣られた汝達まだ其様を眼ぢや
頼もしくあ、アハ、笑つて仕舞へ甘いぞく貴様たちは甘す
ぎた奴だぞ、ちと我の本名でも聞て締のあ、其顔の筋の弛みを
治せ小蝶も聞て吃驚するあ手長の海老長またの名は藍摺の石

六とは我のこたよ、オイ松本早川笑つて仕舞へ、まだ化やうが
 足りあいはつ、初對面の御馳走を先日からは大分ありがたう
 とざりました、いづれ御禮は近日いたそう早川々々年甲斐もあ
 い、まだ分らぬか松本何をぼんとして居る、眼に篋子でも張りは
 しまし我の顔ばかり見る事はあいと巻き出したる管絃張し
 く七巻まかれて驚きしが早川前へ乗り出して。兄貴は神戸の。
 流石は海老長氣がついたか

第八、あゝ厭世の中

林様と呼ばれし人は長者議員の庄司様といふが化たありとか
 もひの外、神戸有名の悪徒諏訪山の三次ありと自ら名乗ば早川
 と化たる海老長も松本と化たる石六も仕方あくて。兄貴戲事を
 をしちや困るを、豫て名は聞て居たが初對面にえらい洒落をや

られたと苦笑ひすれば三次も笑ひあがら。其様云はれは其
 様ものだがまア暫く苦笑ひで済して置て呉れ其代りには是か
 ら我が仕手にあつて兄貴達を脇に頼み見事に一つ爲る仕業が
 あるこれ早川耳を假せと云へば。それは耳よりあと持て來る
 兀頭の髪について何か語るひそく聲外へは洩れねど海老長
 が莞爾付く顔にあらはるゝは那善事にはあらざるべし。よい
 か分つたらう、明日そこで逢ふ、今夜は歸つてくれ。兄貴さらば、
 松本来いと早川歸つて一二町も行きじと思ふ頃唯呆れにあき
 れて醉るが如く茫然として居る小蝶の顔を見あがら庄司くす
 くと笑ひ出して。小蝶驚いたらう、おに驚くことは無いもの、
 悪徒といふものは存外白痴なもの我狂言に一杯食はされて我
 を若しや神戸のと向ふから疑つて來た所につけてみ神戸有名

の三次と膽太く云ひ放てば、直ちにそれと信じて仕舞ふ可笑し
 さ、耳について是から東京の者に顔を知られぬが幸福あれば我
 が海老長一群の仲間内々通入つて表面は例の田舎大盡にあ
 りすまし大臣紳士めらの臆に釣をかけて呉れうぞと云へば眞
 に受て大悦びに悦び、彼まゝ立歸りし可笑しさ、これも皆汝が教
 て呉れし故に彼早川を悪徒とさとりて此方が充分考へし揚句
 の智慧に、甘く悪徒とあり果せて彼等を酷く振捨たり、思へば彼
 等は悪黨あがら天罰の加はるべきところのもの故か鈍くも我
 に計られたるを後ではおれは怒るあらむ、ハ、ハ、それを皆彼
 等の自業自得、我は彼等が態とまけて我に與せし金のみ取りて
 一文も損せず、然し不正な金持て居るもつらし、泥へ捨るも勿体
 あり、畢竟は汝の一言より今日の始末もつきと譯されば皆汝と

我どで遊んで仕舞うべし、ハ、ハ、どうだへ田舎者も考ふれば智
 慧を出すもの、此家の噂にも話して大笑ひに笑つて今夜は汝厭
 あらずば飲徹夜して笑はん、といふ底意は、尙化歸りてまた小蝶
 はじめ一家のものを欺す氣か、但し實正に其の通りか怪しく底
 氣味あしきとは是あるべし、

其後早川松本は見えぬと庄司と龜井は折ふし扇屋へ來りて小
 蝶を呼べと小蝶いつも病氣とて來らず。扇屋夫婦其他の妓女
 は皆庄司様く珍重して待遇ぬ。某田舎大盡酷きめに逢た
 る噂ありて其は海老長と今一人どの巧計にかけられたるのよ
 し。某大商人の息子恐ろしき手に乗せられし噂ありて其は石
 六と今一人どの巧計にかけられしことによし。尙扇屋に庄司
 龜井は時々來て小蝶を呼ぶことありしが程歴て有名の悪徒

訪山の三次といふもの御上の手にとられしよしの新聞ありて、
 それを捕へしは龜井と呼びし男のよし。嗚呼厭も世の中と誰
 やらは獨り言せしが其獨り言せしものも終には小新聞に浮名
 を歌はるゝほを化ぬ。
 (をはり)

明治廿四年十月廿五日印刷
 全 年十月廿九日出版

毎月二回發行
 定額二冊十三錢
 郵税四錢

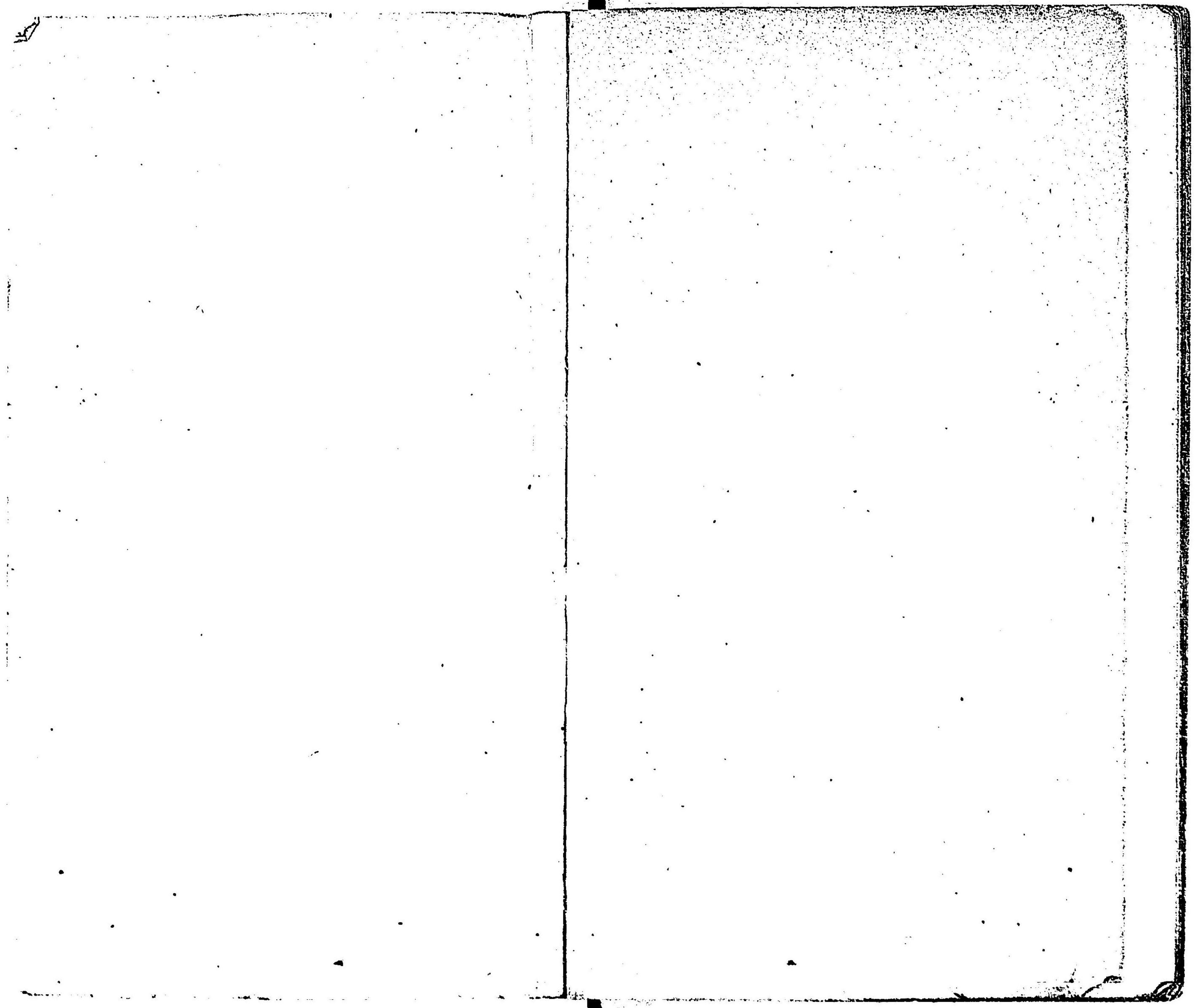
版 權 所 有

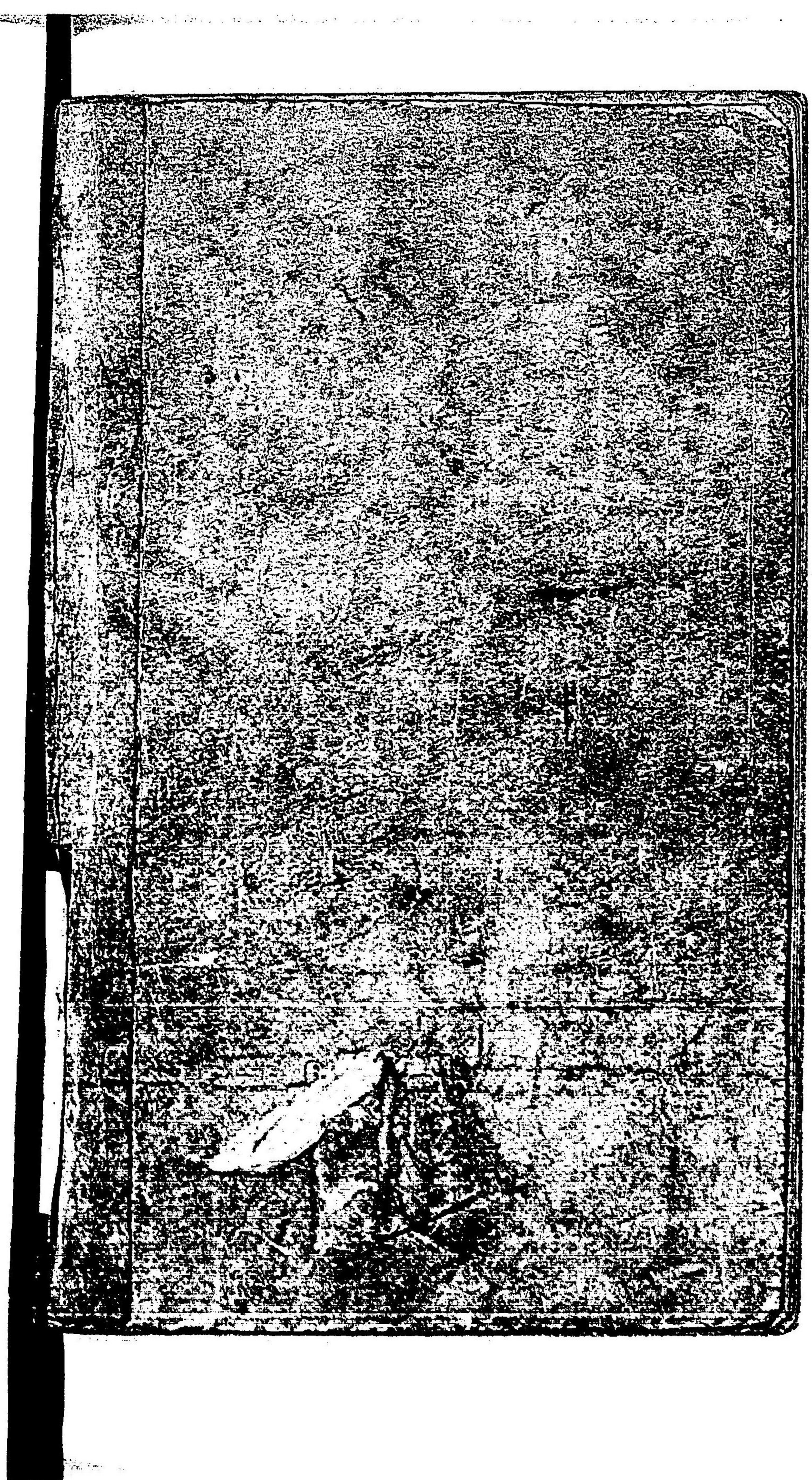


發行者 東京日本橋區通四丁目五番地 和田篤太郎

印刷者 東京京橋區尾張町新地十八番地 下野信郎

發行所 東京日本橋區通四丁目五番地 春陽堂







913.6
M668k

913.6
M668k

093615-000-2

913.6-M668k

恋の重荷・七変化

春陽堂

M24

DBQ-1007

